



日本中央競馬会  
特別振興資金助成事業

## 全日畜「SDGs」ワークショップ（鹿児島会場）

### 畜産DXとアニマルウェルフェアで開く経営の未来

## 速 報 レ ポ ー ト

- ◎ 開催日 令和7年9月4日（木曜日）
- ◎ 時 間 13:00（開会）から16:00（閉会）
- ◎ 会 場 鹿児島サンロイヤルホテル

令和7年12月

全 日 畜

（一般社団法人 全日本畜産経営者協会）

## ( 目 次 )

はじめに

▪ 全日畜「SDGs」ワークショップ（鹿児島会場） プログラム	1
▪ 全日畜「SDGs」ワークショップ（鹿児島会場）の概要	2
▪ 第一部 話題提供	4
鹿児島県における畜産の現状と課題	4
鹿児島県畜産振興課 技術主幹兼企画経営係長 川 野 実 氏	
▪ 第二部 事例発表	11
U-motionによるDX技術導入とアニマルウェルフェアに配慮した肉用牛生産	11
株式会社 高崎畜産 専務取締役 高 崎 淳 史 氏	
捕鳥作業の自動化とアニマルウェルフェアが作る未来展望	15
江夏商事株式会社 生産部 部長代理 原 園 和 洋 氏	
ともに歩んできた16年がもたらしたもの	20
株式会社 秋川牧園 生産部次長 村 田 洋 氏	
▪ 第三部 意見交換会	28
▪ 会場アンケート調査結果	34
▪ 報道等	37

## はじめに

私たち、畜種横断の畜産生産者の団体「全日畜」は、令和6年度から日本中央競馬会畜産振興事業の「畜産経営の持続可能な開発目標対応調査事業」を2カ年で実施しております。

この事業は、我が国の畜産においてSDGsの達成に向け、家畜生産に係る環境負荷軽減やアニマルウェルフェア（以下「AW」という。）に配慮した飼養管理の普及などに取組み、コスト低減や見える化を推進することが生産者に求められていることから、商系飼料を利用する全国・全畜種の畜産経営者を対象として、特に生産者の関心の高い畜産DX及びAWに対する取組状況を調査分析し、課題、解決方策等を明らかにすることにより、畜産経営の安定及び発展に資することを目的としております。

本書は、令和7年9月4日（木）に「畜産DXとアニマルウェルフェアで開く経営の未来」をテーマとした、全日畜「SDGs」ワークショップ（鹿児島会場）の概要を整理した「速報レポート」です。今回は、第一部で鹿児島県農政部畜産振興課の川野 実技術主幹から「鹿児島県における畜産の現状と課題」について話題提供していただき、第二部で3名の畜産経営者が実践している畜産DXの活用方法事例及びAWにも配慮した畜産経営の事例紹介、第三部では第一部の話題提供と第二部の事例紹介に対しての意見交換を行い、それらを本書に速報としてまとめました。ご覧になる方々の参考となれば幸いです。

令和7年12月

一般社団法人 全日本畜産経営者協会  
(全日畜)

# 全日畜 SDGs ワークショップ（鹿児島会場）プログラム

## 1 ワークショップの概要

- ◎ 開催日 令和7年9月4日（木曜日） 13:00 ～ 16:00
- ◎ テーマ 畜産DXとアニマルウェルフェアで開く経営の未来
- ◎ 会場 鹿児島サンロイヤルホテル 2階「開間の間」  
〒890-0062 鹿児島市与次郎1丁目8番10号 TEL 099-253-2020

## 2 ワークショップの構成は「話題提供」「事例発表」「意見交換」の三部構成

第一部 話題提供		テーマ：鹿児島県における畜産の現状と課題
	鹿児島県 畜産振興課 技術主幹兼企画経営係長 川野 実 様 (行政機関)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鹿児島県の畜産の現状と課題を紹介</li> <li>・今後の鹿児島県畜産の目指す方向性を紹介</li> <li>・課題：鹿児島県における畜産の現状と課題</li> </ul>
第二部 事例発表		3名の畜産経営者から実践している畜産DXと畜産AWなどの事例紹介
	(株) 高崎畜産 専務取締役 高崎 淳史 様 (肉用牛)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鹿児島県の薩摩川内市で大規模な肉牛一貫経営を実践</li> <li>・牛の行動管理システム U-motion 導入やアニマルウェルフェア対応による牛の生産性向上や事故防止について紹介</li> <li>・自社ブランド牛の生産、WCS用稲の自社生産や収穫受託も紹介</li> </ul>
	江夏商事(株) 生産部 部長代理 原 園 和 洋 様 (肉用鶏)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鹿児島・宮崎・熊本県でブロイラー生産・処理・販売を経営</li> <li>・日本で初めてアニマルウェルフェアに対応した生鳥コンテナを導入し運用開始</li> <li>・今後、自動捕鳥機の導入と併せ捕鳥業務の省力化と更なるアニマルウェルフェアへの取組を推進</li> </ul>
	(株) 秋川牧園 生産部次長 村田 洋 様 (肉用鶏等)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1972年創業、山口県を中心に鶏肉・卵・牛乳等を生産し、加工・宅配での販売も行う6次産業化に取り組む</li> <li>・若鳥は自然光や風が入る開放型鶏舎で飼養</li> <li>・早くから地域循環に取り組み、秋川牧園の鶏糞を良質な発酵堆肥とし、自社グループでの飼料用米生産に活用する耕畜連携を実施</li> </ul>
第三部 意見交換		発表者と会場のみなさんで意見交換を行います
	一般社団法人 全日本配合飼料価格畜産安定基金 常務理事 引地 和 明 様 (畜産団体)	<p>ワークショップの司会・進行役を務めます</p> <p>発表者と会場参加者との意見交換です</p> <p>生産現場から学ぶ持続可能な畜産経営</p>



## 全日畜「SDGs事業」ワークショップ（鹿児島会場）の概要

開催日時 令和7年9月4日（木）13：00～16：00

開催場所 鹿児島サンロイヤルホテル 開間の間  
鹿児島市与次郎1丁目8-10

テーマ 「畜産DXとアニマルウェルフェアで開く経営の未来」

参加者 鹿児島県をはじめ、宮崎県、山口県など九州・中国地域から、畜産経営者及びその関係者23名、関係団体10名、行政関係者15名、飼料メーカー関係者22名、推進委員等4名、事務局を合わせて81名。



（鶴園全日畜理事による開会挨拶）

第一部では、鹿児島県畜産振興課川野技術主幹から、「鹿児島県における畜産の現状と課題」についての講演があった。概要は、鹿児島県の畜産部門は、肉用牛1,208億円、ブロイラー1,067億円、豚910億円、鶏卵439億円で、全国的に見ても、畜産物生産出荷量では、乳用牛とホルオスを除き、全部門で鹿児島県が全国トップを維持している。

家畜飼養動向で、肉用牛について飼養戸数は減っているものの、飼養頭数は増加している。ブロイラー飼養戸数、飼養羽数は増加し、乳用牛は減少、豚の飼養頭数は増加、採卵鶏の飼養戸数は増加したが、飼養羽数が減少している。

県の令和7年度の畜産振興対策の主な施策は、畜産生産基盤の強化や生産向上政策として畜産クラスター事業、畜産経営安定のための取組みとして牛マルキンや豚マルキン、その他、飼料自給率の向上対策、家畜衛生対策の向上と家畜防疫対策の強化、国内外向けPR・販路拡大などに取り組んでいる。昨年より流通対策係を設置し、流通面の取り組みを強化している。



（鹿児島会場）

第二部の事例発表では、3名の畜産経営者から、実践している畜産DXと畜産AWの事例紹介があった。

最初に、薩摩川内市で大規模肉牛一貫経営を実践している株式会社高崎畜産専務取締役 高崎淳史氏から、①牛の行動管理システムU-motion導入やアニマルウェルフェア対応による生産性向上や事故防止についての紹介 ②自社ブランド牛の生産、WCS用稲の自社生産や収穫受託の紹介。

続いて、鹿児島、宮崎、熊本県でブロイラーの生産・処理・販売をしている江夏商事株式会社生産部 部長代理 原園和洋氏から、①日本で初めてアニマルウェルフェアに対応した生鳥コンテナを導入して運用している状況の紹介 ②今後、自動捕鳥機の導入と合わせ捕鳥業務の省力化と更なるアニマルウェルフェアへの取り組みの紹介。

最後に、山口県を中心に鶏肉、卵、牛乳を生産し、加工・宅配で販売を行い6次化産業に取り組む株式会社秋川牧園 生産部次長 村田 洋氏から、①自然光や風の入る開放型鶏舎における若鳥の飼養 ②地域循環の取り組みとして、秋川牧園の良質な鶏ふんの発酵堆肥を自社グループで飼料用米の生産に活用する耕畜連携事例の紹介があった。

第三部では、会場参加者で意見交換を行った。会場参加の生産者の関心事であるDX・AWに対する質問、意見が生産者から多く出された。その中でも、DX・AW対応を行うとコスト増になることや、作業労働の軽減などでどのような成果が得られるのか。畜産は得てして、堆肥の問題も含めてアニマルウェルフェアにしても加害者みたいな見方をされがちだが、それを解決しようと皆さん頑張っている。現場で実践されて課題や解決方法を関係者みんなで共有すべきであり、どのように対応すべきか苦慮しているか等に関して、意見交換がなされた。

## 第一部 話題提供

**タイトル** 鹿児島県における畜産の現状と課題

**提供者** 鹿児島県 畜産振興課 技術主幹兼企画経営係長 川野 実 氏

### [話題提供の概要]

#### 1 鹿児島県の畜産の概要

鹿児島県の畜産部門は、令和5年度の農業総産出額 5,438 億円のうち 3,754 億円（69%）を占める。内訳は、肉用牛 1,208 億円、ブロイラー 1,067 億円、豚 910 億円、鶏卵 439 億円と続く。加工、流通部門での畜産部門の貢献も大きい。全国的に見ても、畜産生産額では、乳用牛とホルスタインを除き、全部門で鹿児島県が全国トップである。



家畜飼養動向では、肉用牛について飼養戸数は減っているものの、飼養頭数は増加している。ブロイラーは飼養戸数及び飼養羽数も増加、乳用牛は減少、豚の飼養頭数は増加、採卵鶏の飼養戸数は増加したが、飼養羽数は減少している。

県の畜産振興策は、令和7年度の畜産振興を図るための主な施策として、畜産生産基盤の強化や生産性向上対策として畜産クラスター事業など、畜産経営安定のための取組みとして牛マルキンや豚マルキンなど、その他、飼料自給率の向上対策、家畜衛生対策の向上と家畜防疫対策の強化、国内外向け PR・販路拡大などに取り組んでいる。昨年、県内に流通対策係を設置し、流通面の取り組みを強化している。

#### 2 肉用牛生産基盤強化対策

肉用牛では増頭対策を行っている。繁殖農家はこの10年間で3,610戸減少した。担い手では70歳以上が42%と高齢化が進んでいる。肥育農家戸数は10年で217戸減少したが、令和6年度の飼養頭数は過去最高となった。優良繁殖メス牛は増頭から更新への転換を進めている。

生産基盤の強化として、繁殖雌牛の増頭推進に力を入れている。小規模・高齢化の経営継続のため、肉用牛ヘルパー、コントラクター、キャトルセンターの活用も推進し、省力化、スマート農業の導入を進めるとともに、肥育出荷月齢の30カ月から24カ月への短縮を目指している。

#### 3 配合飼料高騰対策

我が国の飼料供給割合は、国産粗飼料の占める割合は20%、濃厚飼料の輸入割合は80%となっている。令和2年からの輸入飼料の高騰で、令和3年からの配合飼料価格安定制度の基金からの補てんが急激に増え、通常補填基金に加え異常補填基金からの補填も行われた。

県としても配合飼料価格高騰対策緊急支援事業を実施しており、令和7年度生産者積立金 800 円/t のうち 200 円/t を支援した。

未利用資源等の飼料化について、稲わらの飼料利用を促進、デンプン粕の利用、焼酎粕の利用なども進めている。現状では、県内の稲わらの利用率は 53.8%である。

飼料増産の取り組みとしては、自給飼料基盤に立脚した畜産経営を確立するため①草地等の基盤整備、②水田や耕作放棄地の活用、③コントラクター組織などを活用した飼料生産の外部化、④飼料の安全性・品質の確保推進などを実施している。自給飼料率の向上策として、地域資源フル活用飼料増産対策にも取り組んでいる。

#### 4 畜産物の販路拡大対策

国家戦略として、輸出促進があり、鹿児島県の認定施設からの牛肉輸出にも取り組んでいる。

牛肉の輸出促進で、現状 175.2 億円の輸出額を 225 億円へ増やす目標である。令和5年度は、鹿児島県から、香港、台湾、米国の順での輸出であったが、令和6年度は、アメリカ、タイ、香港の順で輸出されている。

#### 5 その他

最近の動きとして、畜産業の持続可能性を確保するため、環境にも経営にも優しい、「かごしま GX（グリーン・トランスフォーメーション）プロジェクト創出・推進事業」を立ち上げた。令和6年度の取り組みとして、産学官金の連携により畜産業（肉用牛・酪農）における GX を推進している。

また、2024 年問題でドライバーが不足しており、地域の飼料輸送体制の維持について、ドライバーの負担軽減のため、生産者にも高所作業の負担削減、配合飼料タンク周辺の安全点検など施設の補修や整備をお願いしている。

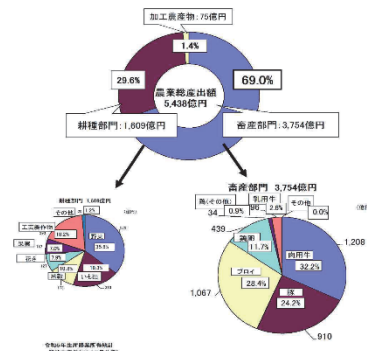
## 令和7年度 全日畜 ワークショップ研修会

- 1 本県の畜産の概要
- 2 肉用牛生産基盤強化対策
- 3 配合飼料価格高騰対策
- 4 畜産物の消費・販路拡大対策
- 5 その他

令和7年9月4日(木)  
鹿児島県農政畜産振興課 企画経営係長 川野 実

## 1 本県の畜産の概要

### 令和5年 鹿児島県の農業(部門別)産出額



1 飼養頭数(令和6年2月1日現在、上位5県)

\* 下位は全国に占める割合・% (単位: 頭、千羽)

区分	順位	全国	1位	2位	3位	4位	5位	備考
乳用牛	1,313,000	北海道	岩手県	熊本県	鹿児島県	鹿児島県	鹿児島県	鹿児島県(16位)
経産牛	826,200	北海道	岩手県	熊本県	鹿児島県	鹿児島県	鹿児島県	鹿児島県(19位)
肉用牛	2,672,000	北海道	岩手県	熊本県	鹿児島県	鹿児島県	鹿児島県	鹿児島県(10位)
肉用種	1,897,000	鹿児島県	岩手県	北海道	熊本県	鹿児島県	鹿児島県	鹿児島県(10位)
肥育牛	841,600	鹿児島県	岩手県	北海道	熊本県	鹿児島県	鹿児島県	交雑種は含まない
繁殖雌牛	640,400	鹿児島県	岩手県	北海道	熊本県	鹿児島県	鹿児島県	交雑種は含まない
豚	8,798,000	鹿児島県	北海道	岩手県	熊本県	鹿児島県	鹿児島県	交雑種を含む
子取り雌豚	758,300	鹿児島県	北海道	岩手県	熊本県	鹿児島県	鹿児島県	交雑種は含まない
採卵鶏	168,599	鹿児島県	岩手県	北海道	熊本県	鹿児島県	鹿児島県	交雑種は含まない
ブロイラー	144,859	鹿児島県	岩手県	北海道	熊本県	鹿児島県	鹿児島県	交雑種は含まない

資料: 鹿児島県畜産(畜産統計) (令和6年2月1日現在)

2 畜産物生産出荷量(令和5年、上位5県)

区分	順位	全国	1位	2位	3位	4位	5位	備考
生乳	2,299,933	北海道	岩手県	熊本県	鹿児島県	鹿児島県	鹿児島県	鹿児島県(10位)
肉牛	1,104,523	北海道	岩手県	熊本県	鹿児島県	鹿児島県	鹿児島県	鹿児島県(10位)
うち和牛	508,677	鹿児島県	岩手県	北海道	熊本県	鹿児島県	鹿児島県	鹿児島県(10位)
うち去勢	271,786	鹿児島県	岩手県	北海道	熊本県	鹿児島県	鹿児島県	鹿児島県(10位)
うち雄	234,570	鹿児島県	岩手県	北海道	熊本県	鹿児島県	鹿児島県	鹿児島県(10位)
豚	16,408,981	鹿児島県	北海道	岩手県	熊本県	鹿児島県	鹿児島県	鹿児島県(10位)
鶏卵	2,437,773	鹿児島県	岩手県	北海道	熊本県	鹿児島県	鹿児島県	鹿児島県(10位)
ブロイラー※1	73,193	鹿児島県	岩手県	北海道	熊本県	鹿児島県	鹿児島県	鹿児島県(10位)

資料: 鹿児島県畜産(畜産統計) (令和5年2月1日現在)  
※1 ブロイラーについては、H27年度から「鶏肉流通統計」(鶏肉流通統計)「畜産統計」の数値を使用

### 本県の家畜飼養動向

#### 1 肉用牛

年次	H31	R2	R3	R4	R5	R6	対前年比
飼養戸数	7,660	7,330	7,030	6,690	6,350	5,980	94.2
飼養頭数	338,100	341,000	351,100	337,800	357,800	362,700	101.4
繁殖雌牛	122,200	115,600	118,600	117,800	121,200	123,100	101.6
肥育牛(乳用種)	138,400	141,800	147,400	142,700	152,900	154,900	101.3
肥育牛(肉用種)	15,200	15,400	14,500	14,700	14,400	12,600	87.5
1戸当たりの頭数	44.1	46.5	49.9	50.5	56.3	60.7	107.8

資料: 鹿児島県畜産(畜産統計) (令和5年2月1日現在)  
※ 繁殖雌牛は、肉用種の繁殖雌牛を除く。

#### 2 乳用牛

年次	H31	R2	R3	R4	R5	R6	対前年比
飼養戸数	183	166	156	147	138	131	94.9
飼養頭数	14,300	13,800	13,500	13,100	12,800	12,000	93.8
経産牛	9,890	9,450	9,590	9,340	8,880	8,530	96.1
1戸当たりの頭数	78.1	83.1	86.5	89.1	92.8	91.6	98.8

資料: 鹿児島県畜産(畜産統計)

### 3 豚

年次	H31	R2※	R3	R4	R5	R6	対前年比
飼養戸数	514	481	477	452	443	387	87.4
飼養頭数	1,269	1,289	1,234	1,199	1,153	1,200	104.1
子取り用雌豚	125.7	107.1	120.2	119.2	114.3	112.3	98.3
1戸当たりの頭数	2,468.9	2,679.8	2,587.0	2,652.7	2,602.7	3,100.8	119.1

資料: 鹿児島県畜産(畜産統計) (令和5年2月1日現在)  
※ R2年度は、鹿児島県畜産センサス調査年(令和5年度)の数値を使用

#### 4 採卵鶏

年次	H31	R2※	R3	R4	R5	R6	対前年比
飼養戸数	119	119	116	103	93	98	105.4
飼養頭数	11,717	11,504	12,008	11,731	11,582	10,196	88.0
1戸当たりの頭数	98,462	96,672	103,517	113,893	124,538	104,041	83.5

資料: 鹿児島県畜産(畜産統計) (令和5年2月1日現在)  
※ R2年度は、鹿児島県畜産センサス調査年(令和5年度)の数値を使用  
※ 飼養頭数は、鶏を除く。20年度からは、鶏を飼育している農家を除く。

#### 5 ブロイラー

年次	H31	R2※	R3	R4	R5	R6	対前年比
飼養戸数	377	411	381	378	390	402	103.1
飼養頭数	27,970	24,874	27,085	28,090	31,285	32,003	102.3
1戸当たりの頭数	74,191	60,522	71,089	74,312	80,218	79,809	99.2

資料: 鹿児島県畜産(畜産統計) (令和5年2月1日現在)  
※ R2年度は、鹿児島県畜産センサス調査年(令和5年度)の数値を使用

### 畜産振興を図るための主な施策(令和7年度)

#### 1 畜産生産基盤の強化や生産性の向上

- 畜産クラスター事業
- 乳用牛生産確保支援事業
- 持続可能な畜産振興対策事業
- 鹿児島県畜産生産基盤強化緊急支援事業
- 第5系統豚造成試験
- 全国和牛能力共進会出品対策事業



#### 2 畜産経営安定のための取組

- 畜産経営技術高度化促進事業
- 畜産特別資金利子補給事業
- 肉用子牛価格安定対策事業(牛マルキン)
- 肉豚価格安定対策事業(豚マルキン)
- 鶏卵価格安定対策事業
- ブロイラー価格安定対策事業
- 配合飼料価格高騰対策緊急支援事業















## ◎国家戦略としての輸出促進

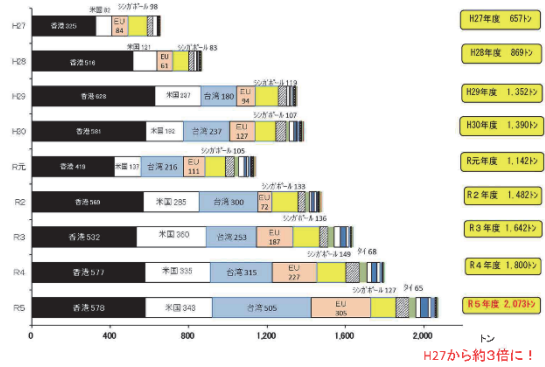
食料・農業・農村基本計画(令和7年4月)  
輸出品目ごとの輸出値

「食料・農業・農村基本計画」での輸出目標(2025年, 2030年)

	2021年	2025年目標	2030目標
牛肉	537億円	1,600億円	1,132億円
豚肉	20億円	29億円	52億円
鶏肉	13億円	45億円	44億円
鶏卵	59億円	63億円	109億円
牛乳・乳製品	244億円	328億円	883億円

出典:農林水産物・食品の輸出拡大実行戦略 令和7年5月30日(農林水産省)

## 本県認定施設からの牛肉輸出量

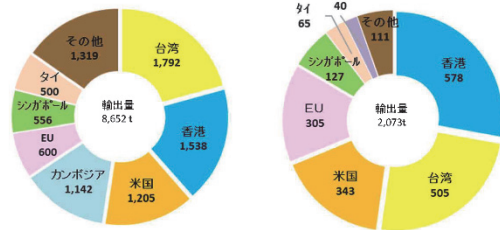


## 令和5年度の牛肉輸出先

令和5年度の輸出量の上位国

- ・全国:台湾、香港、米国、カンボジア、EUの順。
  - ・本県:香港、台湾、米国、EU、シンガポールの順。
- (本県からの牛肉輸出量は、全国輸出量の21%を占めている)

全国からの牛肉輸出量(R5年度)



## 海外での鹿児島県和牛PR

第12回全国和牛能力共進会における「和牛日本一」の称号を前面に打ち出し、県経済連など関係機関・団体と連携し、国内外に向けて積極的なPRに取り組み、「鹿児島県和牛」の販路拡大等に一層の弾みを付け、生産者の所得向上はもとより、本県農林水産業の「稼ぐ力」の更なる向上につなげる。



●海外食品展示会  
タイ[5/28~6/1]、台湾[6/14~17]、香港[6/26~29]、フランス[10/16~26]

## 9 生産振興、販売・流通等に関する施策(9-2, 5, 6)

### ■「和牛日本一鹿児島県販路拡大事業」(拡充)

【令和7年度予算額 43,202千円】

前年度(基準) 9,688千円、一割 34,513千円)

- ＜対象のポイント＞ 鹿児島県の国内外における販路拡大を図るため、「和牛日本一 鹿児島県産品」等への活動支援や啓発活動をターゲットにした取組を強化するほか、海外では、継続した取組に加え、台湾・EU・米国に対する取組を強化します。
- ＜政策目標＞ 鹿児島県の県内においての販路拡大  
※ 本県産品とシンガポール、EU、高特水産品の「稼ぐ力」の向上  
※ マニフェスト項目 02 「稼ぐ力」の向上(農林水産業の「稼ぐ力」の向上)

#### ＜事業の内容＞

- 1 目的  
・鹿児島県産品の認知度向上及び鹿児島県産品の販路拡大  
・鹿児島県産品の認知度向上及び鹿児島県産品の販路拡大  
・輸出による販路拡大
- 2 事業実施主体(実施機関)  
県(10/10)、鹿児島県産品販売促進協議会(1/2以内)  
鹿児島県産品販売促進協議会、鹿児島県産品販売促進協議会  
鹿児島県産品販売促進協議会、鹿児島県産品販売促進協議会
- 3 事業内容  
(1) 国内対策【予算額:29,224千円】  
ア 鹿児島県産品の認知度向上を図るため、P R活動等の実施  
イ 鹿児島県産品の認知度向上を図るため、P R活動等の実施  
エ 鹿児島県産品の認知度向上を図るため、P R活動等の実施  
オ 鹿児島県産品の認知度向上を図るため、P R活動等の実施
- 4 事業期間  
令和7~9年度(372年)

＜事業の進捗＞  
県 鹿児島県産品販売促進協議会、鹿児島県産品販売促進協議会

#### ＜事業イメージ＞



## 5 その他

## 環境にも経営にも優しい! かごしま畜産GXプロジェクト

県2 鹿児島県畜産振興課

### 現状・課題

- 2050年のカーボンニュートラル実現が求められる中、畜産の温室効果ガス排出量の削減が重要課題。うち約6割を牛が占めており、げっ歯目からメタン(CH<sub>4</sub>)が、排泄物からメタン二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)が排出。
- 飼料増産の基盤、牛肉の国内消費の拡大により、肉用牛畜産の経営は極めて厳しい状況。経営者においても、飼育畜産が10年で約4割減少するなど、厳しい状況。
- 畜産由来の温室効果ガスの排出削減策としては、飼料用アミノ酸の増産・削減効果のある飼料(カモナリ等)の活用、排泄物の適正な管理等がある。

畜産業(肉用牛・豚畜)の特長可能性を高めるため  
肉用牛・豚畜・鶏畜の生産コスト削減・生産性向上 牛肉・生乳等の付加価値向上への取組が必要

### 令和6年度の取組

- 畜産資金の連携により畜産業(肉用牛・豚畜)におけるGXを推進
- 畜産関係団体や畜産事業者、飼料メーカー、研究機関、金融機関、県等が連携するコンソーシアムを形成
- 「飼料用アミノ酸」の普及促進に向けた取組を実施(農業における飼料用アミノ酸の活用・ノウハウを支援)
- ※「飼料用アミノ酸」は、飼料と共に牛に給与することで不足しているアミノ酸を補給し、アミノ酸バランスを改善することで、飼料効率を高め、肉質向上、牛の生産性を向上するとともに、飼育期間の短縮等により温室効果ガス排出削減に寄与。
- ※その他の温室効果ガス排出削減策(カモナリ等)の検討やカーボンプリントの創出・活用、牛肉・生乳等の付加価値向上に向けた取組等

### 本取組で期待する効果

- 畜産業(肉用牛・豚畜)における温室効果ガスの排出削減
- 肉用牛・豚畜・鶏畜の生産コストの低減、生産性の向上による経営改善
- カーボンプリントの創出・活用による肉用牛畜産等の収入増加
- 販路拡大への取組を通じた畜産牛肉・生乳等の付加価値向上

## 第二部 事例発表

**タイトル** U-motion による DX 技術導入とアニマルウェルフェアに配慮した肉用牛生産  
**提供者** 株式会社 高崎畜産 専務取締役 高崎 淳史 氏

### [話題提供の概要]

#### 1 経営概要

鹿児島県薩摩川内市において、法人組織により黒毛和牛の繁殖・肥育一貫経営及び主食用米、稲 WCS、加工用米の生産、利用、販売を行う耕畜の複合経営体である。経営は、グループ会社の肉用牛生産を担う（株）高崎ファーム、飼料の仕入れ販売を担う（株）MMK との連携で進めている。家畜飼養頭数は、黒毛繁殖和牛 356 頭、肥育牛等 2,634 頭である。グループ会社の高崎ファームは、4,060 頭の肥育牛を飼養しており、グループ全体では 7,000 頭を飼養している。



（株）高崎畜産は、2007 年（平成 19 年）に経営を開始し、薩摩川内市の 3 カ所に農場を有す。現在社員数は 20 名、うち農業班従業員数 7 名である。水田、飼料生産基盤の経営面積は、主食用米 4ha。加工用米 52ha、WCS 用稲 22ha、刈取り委託作業 47ha である。

「北さつま高崎牛」、鹿児島黒毛和牛「西郷（せご）どん牛」、「鹿児島黒牛」の自社ブランド牛を出荷し、これまで全国枝肉共励会「優良賞」など受賞実績は多数となっている。（令和 7 年 7 月 7 日）777 のおめでたい七夕の日に福岡食肉市場にて開催された「サマーミートフェア 2025」において、最優秀賞を獲得した。

#### 2 畜産 DX とアニマルウェルフェア（AW）の取り組み

畜産 DX 技術として、令和 5 年にデザミスの U-motion を導入し、牛の健康状態・採食状態を確認、個体に応じた対応を実施している。U-motion では、首、耳に送信機を取り付け、データ送信、サーバー処理し、利用者は PC、タブレット、スマホからサーバーへアクセスしてアラートやデータ、グラフを受信する。

個体のモニタリング項目は、動態、横臥、起立反芻、横臥反芻、起立静止、採食の 6 項目である。加速度センサーで牛の動き、気圧センサーで牛の高さを検知する。

繁殖牛の発情、分娩兆候を把握でき、繁殖成績の向上が期待できる。肥育牛については、疾病の発生、起立困難等による事故を防ぐことが可能。

U-motion は令和 4 年クラスター事業を申請し導入。今後、増頭しているのも、令和 7 年度更にクラスター事業で導入予定。

U-motion の導入による効果としては、①繁殖牛においては、授精のタイミングが可視化され、分娩間隔の短縮や繁殖成績の向上、②肥育牛においては、起立不能がアラートで知られることにより、従業員の家畜管理作業が軽減され、事故率も 0.5%程度と低くなっている。従業員の繁殖に対する管理意識の向上につながった。

DX 技術導入の課題としては、ハード、ソフトともイニシャルコスト、維持管理コスト共に高いこと、DX 技術は、操作手順が高齢者や機械に不慣れな人間には難しいことなどがある。このため、他のシステムとの連携等による簡便化が必要。また、導入には国などからの助成があると助かる。

AW の取り組みとして、①各農場を清潔に保ち、ふわふわのオガコを引き詰めている、②各牛舎の天井には何台もの大型扇風機を配置し、牛房の床を乾燥させ清潔を保っている、③暑さ対策として、各牛舎の天井にはミストの散布機、屋根への細霧装置を設置し、ストレス軽減を目指している。

AW の取り組みによる効果としては、疾病や事故の発生が減少したことが挙げられる。AW の取り組みは、牛肉の海外輸出にもつながると考えているので、現在取り組んでいる体制を継続したい。

家畜飼養管理は作業従事者の目視・確認等を徹底することを基本とし、畜産 DX による家畜の生産管理や作業従事者の労働環境をよりよくすることにつながる。これにより、生産性の向上を図ることが出来ると考えている。

### 3 その他

地域資源の利活用に配慮して、堆肥舎では 10 日に 1 度は攪拌し、発酵菌を入れてバイオ技術を駆使して消臭対策を行い環境保全には万全を期している。堆肥は輸出もしている。



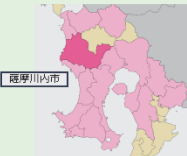
## U-motionによるDX技術導入とアニマルウェルフェアに配慮した肉用牛生産



北さつま高崎牛



西郷(はご)どん牛



2025年9月4日  
株式会社 高崎畜産  
専務取締役 高崎 淳史

## 経営概要

設立 2007年(平成19年)5月9日

社員数 20名 令和8年6月1日

事業内容 黒毛和牛繁殖 356頭

黒毛和牛肥育等 2,684頭

主食用米 (4.46 ha)

加工用米 (52.00 ha)

WCS 用米 (22.15 ha)

河取委託作業 (47.38 ha)



グループ会社

株式会社 高崎ファーム

株式会社 M&G

### 主な受賞歴

出品日	出品共助会・研究会・共進会等	市場等
H25.11.18	平成 25 年度九州肉牛研究会冬季枝肉共助会	福岡食肉市場
H27.11.16	平成 27 年度九州研究会冬季枝肉共助会	福岡食肉市場
H28.07.11	平成 28 年度九州肉牛研究会夏季枝肉共助会	福岡食肉市場
R2.04.02	令和 2 年度博覧記念ミートフェア	福岡食肉市場
R2.04.21	第 92 回出荷者組合共助会	福岡食肉市場
R2.07.06	サマーミートフェア 2020	福岡食肉市場
R1.07.28	第 93 回出荷者組合共助会	福岡食肉市場
R2.11.10	令和 2 年度九州肉牛研究会冬季枝肉共助会	福岡食肉市場
R2.11.24	第 94 回出荷者組合共助会	福岡食肉市場
R4.07.26	第 99 回出荷者組合共助会	福岡食肉市場
R4.11.22	第 100 回出荷者組合共助会	福岡食肉市場
R4.12.14	令和 4 年度神戸市塩屋和牛「種」枝肉共進会	神戸市塩屋和牛市場
R5.10.20	第 14 回神戸市西部市場銘柄和牛共進会	神戸市塩屋和牛市場
R7.07.07	サマーミートフェア 2025	福岡食肉市場

### (株) 高崎畜産農場



### (株) 高崎畜産農場



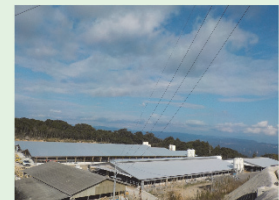
スプリンクラー設置



縦窓装置



### (株) 高崎ファーム農場



黒毛和牛肥育牛 3,992頭

### 良質堆肥の生産及び海外輸出

堆肥製造工程

1・牛舎より堆肥搬出作業



3・堆肥倉へ搬入



2・牛舎へおが屑搬入作業



4・堆肥搬出作業



・10 ロット 1 回搬出作業を計  
して実施を完了。  
・搬入作業は毎日  
1 回実施し、約 3 ヶ月で完成品

### 海外輸出 ラオス、カンボジア、ミャンマー、ベトナム



フレコン出荷



ラオス



カンボジア

## 水田活用による自給飼料確保

年度別作付面積	WCS 作付面積 <sup>1)</sup>	主食用米作付面積 <sup>2)</sup>	加工用米作付面積 <sup>3)</sup>	飼料用米作付面積 <sup>4)</sup>	刈取委託面積 <sup>5)</sup>	計 <sup>6)</sup>
令和2年	11,000ha <sup>1)</sup>	8,700ha <sup>2)</sup>	39,600ha <sup>3)</sup>	47,200ha <sup>4)</sup>	106,500ha <sup>5)</sup>	
令和3年	11,670ha <sup>1)</sup>	7,500ha <sup>2)</sup>	45,400ha <sup>3)</sup>	1,800ha <sup>4)</sup>	42,300ha <sup>5)</sup>	106,670ha <sup>6)</sup>
令和4年	10,810ha <sup>1)</sup>	7,500ha <sup>2)</sup>	45,400ha <sup>3)</sup>	1,800ha <sup>4)</sup>	43,500ha <sup>5)</sup>	109,010ha <sup>6)</sup>
令和5年	20,770ha <sup>1)</sup>	5,100ha <sup>2)</sup>	49,550ha <sup>3)</sup>	0ha <sup>4)</sup>	45,500ha <sup>5)</sup>	120,920ha <sup>6)</sup>
令和6年	21,780ha <sup>1)</sup>	5,100ha <sup>2)</sup>	52,250ha <sup>3)</sup>	0ha <sup>4)</sup>	47,380ha <sup>5)</sup>	126,510ha <sup>6)</sup>

令和6年度までの追加をお願いします。

農産物の作付面積	5月 <sup>1)</sup>	6月 <sup>2)</sup>	7月 <sup>3)</sup>	8月 <sup>4)</sup>	9月 <sup>5)</sup>	10月・11月 <sup>6)</sup>	12月 <sup>7)</sup>
稲(約12,000ha)	播種 <sup>1)</sup>	水管理 <sup>2)</sup>	水管理 <sup>3)</sup>	水管理 <sup>4)</sup>	WCS刈取 <sup>5)</sup>	主食用米刈取 <sup>6)</sup>	増肥散布 <sup>7)</sup>
麦(約1,000ha)	播種 <sup>1)</sup>	除草 <sup>2)</sup>	除草 <sup>3)</sup>	除草 <sup>4)</sup>	ロールアップ作業 <sup>5)</sup>	増肥・管理 <sup>6)</sup>	増肥散布 <sup>7)</sup>
大豆(約1,000ha)	播種 <sup>1)</sup>	除草 <sup>2)</sup>	除草 <sup>3)</sup>	除草 <sup>4)</sup>	増肥・管理 <sup>5)</sup>	増肥散布 <sup>6)</sup>	増肥散布 <sup>7)</sup>

農業従事者数 7名<sup>1)</sup>

WCS用稲生産農家より刈取りの委託請負しWCSを供給して頂き自社でWCSを消費している。<sup>2)</sup>

11月12月にWCS用稲生産農家へ自社増肥の供給散布をしています。<sup>3)</sup>

自社増肥の消費を促すとともに、WCS及び主食用米生産農家へ増肥を供給することにより化学肥料の購入の抑制にも繋がり経費を削減することが出来た。<sup>4)</sup>

自社の圃場には化学肥料を入れることは一切しません。<sup>5)</sup>

## DX技術の導入・AWの取り組み

- DX技術として、牛の行動管理システムU-motionの導入による繁殖・肥育成績の向上・事故防止対策

- AWの取り組みとして、農場を常に清潔に保ち、大型換気扇や細霧装置等の導入により畜舎の温度管理、特に暑熱対策を行い、肉用牛のストレス軽減と損耗防止対策に取り組んでいる



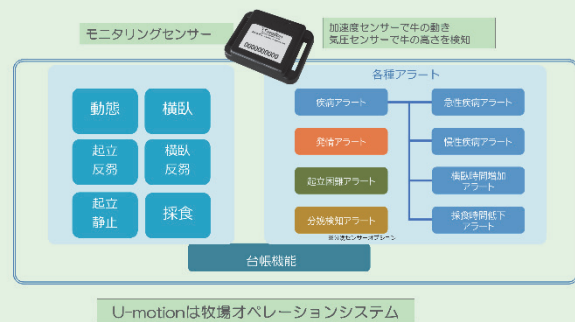
## 畜産DX(U-motion)の導入

台帳管理  
発情発見  
起立困難発見  
牛の行動モニタリング  
疾病早期発見

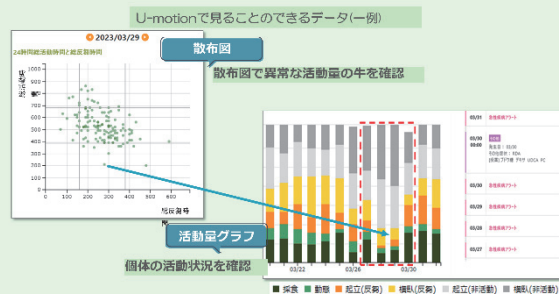
U-motionとは  
効率的な牧場運営に寄与する  
経営改善ツール

PC、タブレット、スマホ全てのデバイスに対応

## 畜産DX(U-motion)の導入



## 畜産DX(U-motion)の導入



## 畜産DXの取り組み状況

- 畜産DXの技術として、令和5年からU-motionを導入し、繁殖牛・肥育牛に装着。繁殖牛においては、発情・分娩兆候を把握できることで繁殖成績の向上に取り組んでいる。肥育牛については、疾病・起立困難等による事故防止対策に取り組んでいる。
- U-motionは令和4年度畜産クラスターリース事業により導入。さらに増頭分に対し令和7年度同事業で導入予定。

## 畜産DX・AWの取り組み成果

- 繁殖牛においては、授精のタイミングが可視化され分娩間隔の短縮や繁殖成績が向上
- 肥育牛においては、起立困難牛をアラートで知らせることで事故防止や従業員の管理作業が軽減
  - 令和6年度起立困難牛の確認回数 123回
  - うちアラートお知らせ回数 95回
  - 肥育牛の事故頭数 12頭(事故率0.5%)
- 従業員の繁殖に対する管理意識が向上
- AWの取り組みにより、疾病及び事故の発生が減少

## 畜産DX・AWの取り組みの課題

- 畜産DXはハード、ソフトともイニシャルコスト、維持管理コストともが高く経営を圧迫。
- 畜産DX技術は、操作手順が高齢者や機械に不慣れな人間には難しいため、他のシステムとの連携等による簡便化が必要。
- AWは基本的には現在取り組んでいる体制を継続し、加えて、海外輸出に関しAWの要件等にも対応していく。
- 飼養管理は作業従事者の目視・確認等を徹底することを基本とし、畜産DXによる家畜の生産管理や作業従事者の労働環境をより改善することで、生産性の向上を図ることが必要である。

**タイトル** 捕鳥作業の自動化とアニマルウェルフェアが作る未来展望

**提 供 者** 江夏商事株式会社 生産部部長代理 原園 和洋 氏

## [話題提供の概要]

### 1 経営概要

江夏商事ホールディングの傘下にある法人組織で、宮崎市を拠点にブロイラーの生産・販売、及び飼料の販売を手掛ける。江夏商事ホールディング（株）の傘下には、「江夏商事（株）（宮崎県）：ブロイラー生産、鶏肉・加工品販売」、「宮崎サンフーズ（株）（宮崎県）：食鳥処理、加工」、「鹿児島サンフーズ（株）（鹿児島県）：ブロイラー生産、食鳥処理」、「ひなたライン（株）（鹿児島県）：飼料・生鳥・鶏肉運搬」、及び「センターフーズ（株）（鹿児島県）：鶏肉加工」がある。グループ内で宮崎と鹿児島の2県に処理場拠点を作ることで、南海トラフ、鳥インフルエンザのリスクを回避している。1日の処理羽数は6.7万羽で、将来は8.8万羽に増産する計画である。ヒナ、飼料を外部購入するほかは、すべてグループ内で生産・加工し、販売している。



1900年（明治33年）江夏芳太郎が宮崎市都城市倉の馬場にて米穀・荒物・雑貨商を創業。1968年（昭和48年）江夏産業（株）を立ち上げ、養鶏業を開始した。2018年（平成30年）に養豚事業を移譲後、養鶏事業に特化し業務を行っている。

### 2 捕鳥作業の自動化とアニマルウェルフェアの取り組み

2020年10月よりコンテナによる捕鳥を実施し、捕鳥作業の省力化を推進している。今後、更なる省力化を目指し、自動捕鳥機「Apollo Compact Pro」の導入を計画。自動捕鳥機・コンテナ捕鳥により、作業者の負担軽減だけでなく鶏へのストレス低減によるAWを同時に実現。

#### 1) 取り組んだ動機

生産部門では、育種改良による出荷日齢の短縮や飼養管理の機械化により、生産羽数は増加している。しかし、捕鳥・運搬段階で、カゴ捕鳥による重労働のため人手不足が生じ、日当り捕鳥羽数が減少し生産増に追いついていない。また処理・加工部門では、処理能力は増加したが、捕鳥羽数が確保できないため、実稼働が制限されていた。

また、カゴ捕鳥は、6～7羽/箱（約25kg）で搭載車1台当たり378カゴ積むが、捕鳥したカゴを車に8段積み上げるなど、すべて手作業で重労働であった。また、重労働だけでなく、捕鳥手法にコツがあり、捕鳥技術の習得に時間を要する。このため、新規採用が厳しく採用後も離職率が高かった。ベテランの社員は高齢化し定年退職するなどやめていくことで人も捕鳥羽数も頭打ちとなり、捕鳥業務が生産事業から処理事業の発展のボトルネックとなっていた。



## 2) 取り組み状況

オランダ・Marel 社製の捕鳥コンテナおよび、イタリア・CMC 社のコンテナ専用フォークリフトを導入。コンテナは EU の AW の認定を受けたもので、床面通気がよく、換気ができることで、鶏のストレスの軽減が可能。コンテナ 1 台に 200 羽を入れ、輸送車に 10～12 台を載せる。

導入するにあたって、全農場の鶏舎間口や鶏舎前スペースを調査し、コンテナ運用のシミュレーションを実施。更なる省力化とアニマルウェルフェア向上のため、CMC 社製の自動捕鳥機「Apollo Compact Pro」導入を計画している。

## 3) 取り組みによる成果

捕鳥コンテナおよび、CMC 社のコンテナ専用フォークリフトの導入により、労働負担が軽減され、捕鳥時間も短縮した。問題点を洗い出し、改善策を講じることでコンテナ捕鳥割合を上げており、現在グループ全体で 90%以上となっている。特にさつま地区では 100%コンテナ捕鳥へ移管出来た。トラック 1 台当たりの運搬羽数は生鳥カゴに比べ若干減少したものの、コンテナを安全に運ぶため、トラックを改造（屋根を昇降）し安全に業務が出来るようにした。

こうした取り組みにより、労務省力化に伴い、社員の定着率向上につながった。

## 4) 今後の取り組み

CMC 社の自動捕鳥機を導入する計画である。導入により①捕鳥作業が楽になり、危険な作業が減る、②鶏の損傷を減らすという 2 つの効果が期待している。自動捕鳥機は EU で AW の認定を受けている。省力化にも寄与し、4 人で 8,000 羽/時間の捕鳥が可能となる。コンテナ捕鳥により、①働き手を限定しない、②省力化と雇用の拡大、③人と鶏の両方にやさしい AW が実現されており、さらに未来を見据え、④自動捕鳥機導入の挑戦を続ける。当社が捕鳥機の実用化を図ることで、業界全体にある捕鳥作業の問題が解決できればよいと思う。

## 5) 取り組みの課題など

取り組みの課題としては、農場までの取り付け道路が狭く、大型車両の通行が難しい農場がある。また、海外製品を日本仕様へアジャストさせる改造や運用方法が難しい。導入当初、国内代理店がなかったため（現在は日本代理店有り）、当社が直接、販売会社と交渉や部品購入を行っていた。また海外の商取引が煩雑であった。

## 6) 国等への要望等

自動捕鳥機など先進的な農業機械導入に対する支援及び地方における人材確保支援や農場までのインフラ整備の拡充をお願いしたい。

enatsu

# 捕鳥作業の自動化とアニマルウェルフェアが作る未来展望

## GPコンテナによる省力化実践

2025年09月04日 全日畜ワークショップ

江夏商事株式会社 生産部 原園和洋

enatsu

## 目次

1	会社概要（当社の強み）	
2	カゴ捕鳥の課題	
3	解決策	
4	成果	
5	将来展望（自動化／展開）	
6	まとめ	

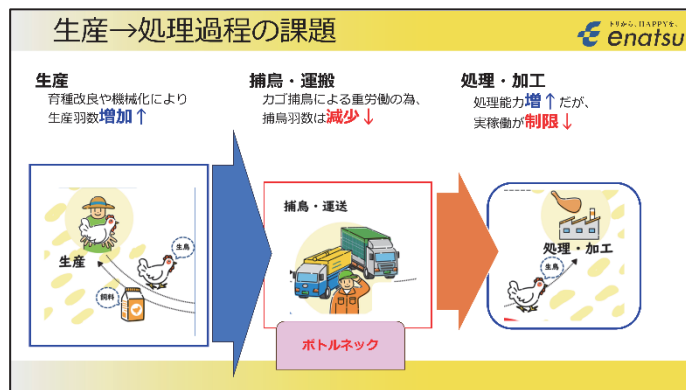
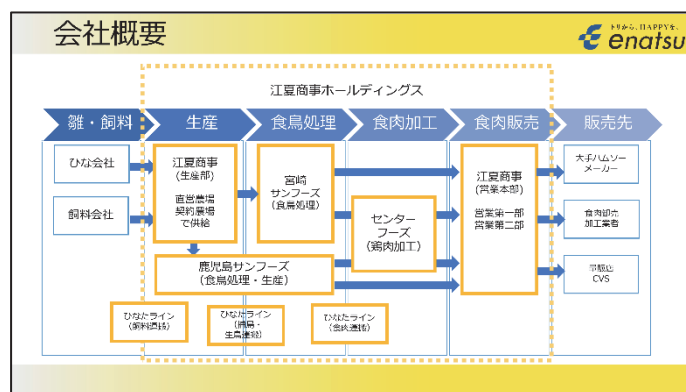
enatsu

## 会社概要（当社の強み）

鹿児島県・宮崎県両県に処理場・農場が分散（疾病・災害対応）

**江夏商事株式会社（生産・鶏肉販売）**  
 本社：宮崎県宮崎市  
 設立：1900年  
 代表：代表取締役会長 江夏俊太郎  
 代表取締役社長 岩崎和也  
 資本：1000万円  
 従業員：86名（生産部41名）  
 体制：直営＋契約農場→処理→加工・販売をグループ内で一貫管理

**グループ会社**  
 ○宮崎サンフーズ（宮崎県新富町）  
 ○鹿児島サンフーズ（鹿児島県出水市）  
 ●センターフーズ（鹿児島県いちき串木野市）  
 ◆ひなたライン（鹿児島県さつま町）



enatsu

## 捕鳥のボトルネック要因

課題

- 重労働（重量物の移動・積卸など）
- 新規雇用が厳しい・続かない
- 既存社員の高齢化・定年
- 捕鳥技術の習得に時間を要す
- 1人当りの捕鳥羽数

enatsu

## 解決策（捕鳥コンテナ紹介）

自重：360kg 集鳥200羽以上 1215mm

1200mm 2160mm



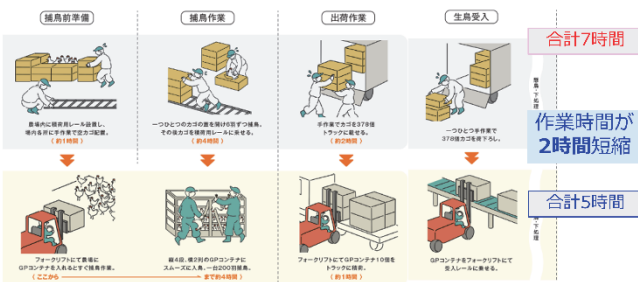
## コンテナ運搬車（トランスポーター）



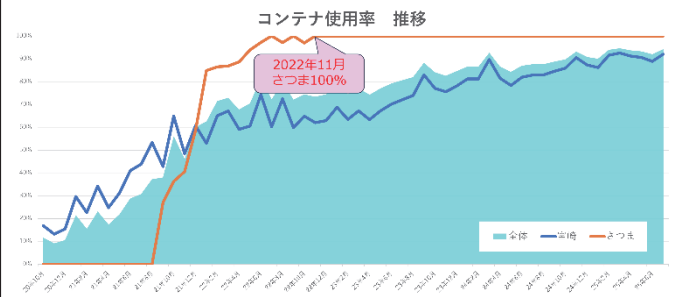
## 成果（捕鳥作業）



## 成果（カゴvsコンテナ時間比較）



## 成果（コンテナ捕鳥割合）



## 取組み（トラック当りの羽数）



7羽詰め/カゴ	生鳥カゴ 5kg/カゴ	GPコンテナ 360kg/Ct	カゴ/コンテナ率
大型トラック（20t未満）	2,646羽	2,160羽 27羽×8段×10Ct	81.6%
	10,225kg	10,404kg	101.8%
大型トラック（20t超）	2,835羽	2,400羽 25羽×8段×12Ct	84.7%
	10,955kg	11,880kg	108.4%

6羽詰め/カゴ	生鳥カゴ 5kg/カゴ	GPコンテナ 360kg/Ct	割合
大型トラック（20t未満）	2,268羽	2,160羽 27羽×8段×10Ct	95.2%
	9,034kg	10,404kg	115.2%
大型トラック（20t超）	2,430羽	2,400羽 25羽×8段×12Ct	98.8%
	9,680kg	11,880kg	122.7%

※積載重量は車種によって異なります

## 取組み（コンテナ積卸対策）



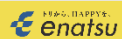
## 取組み（トラック積作業）



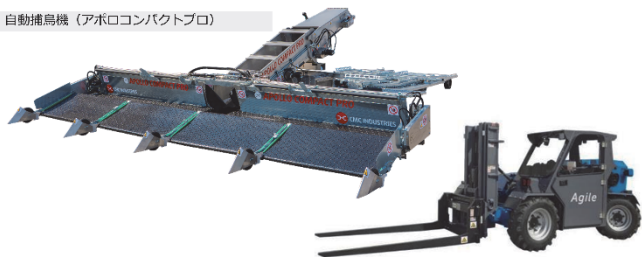
## 取組み（トラック屋根昇降）



## 将来展望（自動捕鳥機の導入）



自動捕鳥機（アボロコンパクトプロ）



鶏舎用フォークリフト（アジャイル）

## 将来展望（自動捕鳥機の導入）



**CMC INDUSTRIES**  
Leading in Load Solutions



viale S. Pertini 66, 25046 Cazzago S.M. (BS) ITALY  
www.cmcindustries.com - info@cmcindustries.com

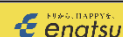
enatsu products.com / enatsu / ccmrccscolabrio  
© 2019 CMC Industries S.p.A. - all rights reserved

## まとめ



- ① 働き手を限定しない、省力化と雇用の拡大
- ② 人と鶏、両方にやさしいアニマルウェルフェア
- ③ 未来を見据えた自動捕鳥機の挑戦

## まとめ



**タイトル**        **ともに歩んできた 16 年がもたらしたもの**  
                      **～飼料用米生産者グループと秋川牧園～**  
**提 供 者**        **株式会社秋川牧園 生産部次長 村田 洋 氏**

**[話題提供の概要]**

**1 経営概要**

(株) 秋川牧園は山口市仁保下郷に本部を置く。山口県を中心に、中国・九州地方の専用農場で、鶏肉、卵、牛乳、野菜など様々な生産物を生産し、自ら加工し、販売まで手掛ける農業生産企業である。生産から販売まで、(株) 秋川牧園がネットワークのセンターとして高度に機能分担している。ネットワーク化販売先は、グリーンコープや首都圏の生活クラブなどの生協が主体。宅配による販売も多い。連結子会社として、若鶏の一次処理を担う(株) チキン食品、若鳥の飼育を担う(株) 菊川農場、採卵鶏の飼育を担う(有) 篠目三谷、乳牛の飼育を担当する(有) むつみ牧場、栽培時に農薬や化学肥料を使わない野菜生産及び自給飼料の生産を担当する(株) ゆめファームがある。



1972 年創業。社長の祖父が 1932 年に中国大連郊外に秋川農園を創設したのがはじまり。「口に入れるものは間違っていない」という理念のもと、食鳥、採卵鶏、乳牛、野菜生産、自給飼料の生産、生産物の加工、全国へ宅配を行っている。野菜は無農薬、無化学肥料で生産している。

従業員数は、正社員 320 名 (令和 6 年 1 月現在)、パートを含めると総数約 480 名になる。

家畜・家禽の飼養羽数は、肉用鶏 210 万羽、採卵鶏 11 万羽、乳用牛成牛 60 頭である。

経営面積は、飼料用米委託 生産者グループの水田作付け総面積は 170ha、WCS 用稲は 2ha の作付け、野菜畑は 10.6ha である。

**2 畜産 DX とアニマルウェルフェア(AW)の取り組み**

肉、豚肉、牛肉、牛乳、鶏卵、野菜を生産と加工、販売の品質管理、技術開発、販売などの役割については、組織の要である(株) 秋川牧園がネットワークのセンターとして高度に機能分担しネットワーク化による管理。

農場の IT 化 (餌残量測定装置など)、ペーパーレス化で農場管理の労働力節減化を図っている。

AW の取り組みは、肉用鶏は、日光が注ぎ込む開放型鶏舎で自由に運動しながらのびのびと過ごさせる方式で飼養。採卵鶏は、平飼いで AW に配慮した飼養方式を採用。鶏舎は平飼い方式を増設している。

取り組みの背景としては、肉用鶏は、飼料用米の給与、開放鶏舎で AW に配慮した飼養管理方式を採用しているが、これは取引先の生協からの提案もあった。

### 3 飼料用米の生産による地域循環型経営を実現

2009 年から飼料用米と鶏ふん堆肥の循環に取り組み、これまで 16 年経過した。多収品種に取り組み、現在はモミ米で 1,000 kg/10 a の収量を実現している。

飼料用米の取り組みでは、最初から飼料用米の圃場視察会を行った。これは、飼料用米生産に参加する農家を引き連れて、圃場を視察し、生育状況を調査し、農家同士で意見交換し、生産技術を高める活動で、現在まで継続されている。当初は農協に働きかけたが、難しいと断られた。現在は、農協、全農、県、市、農研機構も関与している。高収量飼料用米の種子は、他県へも販売しているが、他県からも圃場視察に参加するようになった。今では、圃場視察会の当日には、朝 06:30 に出発し、19:30 まで 220 km を走って、県内に散在する圃場を見て回るイベントとなっている。この圃場視察会は、秋川牧園の飼料用米プロジェクトが成功したカギとなっている。

秋川牧園では、独自に生産者会議多収穫表彰を行っており、2016 年以降、毎年のように多収日本一コンテストで受賞するようになった。近年のコメ問題で、県北部のコシヒカリ産地でコメの単価が高騰し、マスコミであおられた結果、令和 7 年度の飼料用米作付面積は令和 6 年の 179 ha に対し、171 ha へ減少した。

飼料用米種子生産は、北陸 193 号の種子が不足したことから、2010 年から開始し、種子を安く販売するネットワークをつくった。2012 年からは種子を外販するようになり、多収日本一コンテストの受賞で注目されたことから、外部視察依頼が増え、情報が拡散し、種子の外販先も増加した。種子の外販先の増に伴い、鶏糞堆肥の外販へも波及し、島根県に鶏糞堆肥を出すようになった。

都会の消費者は食料が豊かだが、輸入食料に頼っているのが現状である。地方では農業者は減少し、国産農産物も十分に届いていないので、耕畜連携に消費者を巻き込み、消耕畜連携を目指し、食料安全保障に貢献すべきである。

飼料用米の多収量品種は、当初は真の多収性があったわけではない。食用米と収量に大差がなく、県知事が認めれば認定されるものであった。コンタミも多かった。多収量品種は更新を進めるべきであり、多様なニーズに合った多収量品種の育成が必要である。

飼料用米が作付けられた全国水田 10 万 ha は、食料自給率の向上よりも、食料自給力の維持に貢献した。飼料用米作付けで水田を水田として活かすことにより、コメ問題による令和 7 年度の食用米の作付け増に対応できた。国の政策で、転作作物として子実トウモロコシが奨励されたが、水田では収量があがらなかった。台風で倒れ、害虫の被害を受け、草丈が高いため中山間ではクマが隠れた。

秋川牧園の堆肥は、2009 年以前では飼料用米に 95%利用され、残りは直営のゆめファームで有機野菜生産に使用していた。2025 年では、飼料用米への利用割合は 78%へ減少し、ゆめファーム 11%、外販 11%となっている。ゆめファームでは、各圃場が標高差 300m に分布していることを利用して、50 品目の野菜を鶏ふん堆肥のみで生産し、追肥も行っていない。これからはホップを作り、ビール製造したいと考えている。野菜作りには若い人が参加し、現在 25 名で運営している。

ゆめファームは、当初、村田一人でやっていた。平場ではドリフトで農薬がかかるため、中山間地に農地を求めた。中山間地の農地の管理は大変で、水路の清掃なども人が集まらなかった。ゆめファームで、スタッフを 5～6 名連れて行くと、水路の維持管理などを行うので地元から喜ばれ、水田はすべて貸してくれた。ゆめファームの堆肥舎から、堆肥を農地に散布するので、資源の地域循環ができています。

消費者という実需者の理解を得て味方になってもらい、消・耕・畜連携を図り、自給率ではなく自給力を向上させたい。

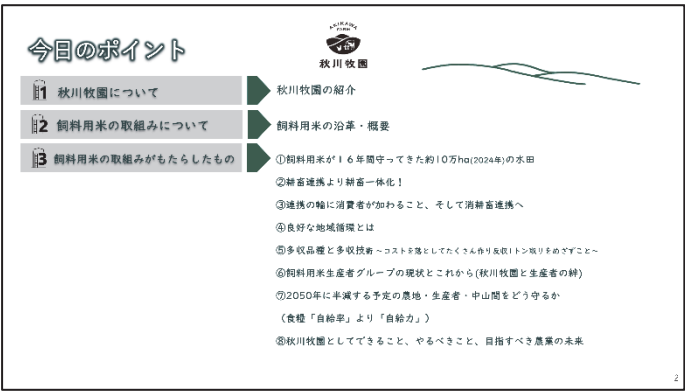
畜産農家は堆肥作りを耕種農家の立場で行うべきである。結果が良ければ堆肥を継続的に使ってくれる。農家には堆肥ではなく、原料をもらったと思ってもらうことが重要である。このためには農家に堆肥舎が必要なので、行政の支援をお願いしたい。農地は鶏ふん堆肥だけで変わっていく。初年度は結果が出ないかもしれないが、何年か経つと確実によくなっていく。

高収量食料用米品種であるオオナリ、北陸 193 号は誰が作ってもモミ米 1,000 kg がとれる。茎や葉の養分が実に集まるので、適期に刈取するのが重要である。北陸 193 号は最強収量を出す茎の頑丈さが課題なので、クボタには飼料用米向けのコンバインを開発するよう提案している。

水田を畑地に転換するのではなく、水田としてコメを作らせて欲しい。飼料用米づくりはコメ作りである。2050 年には農地は半減すると言われる。農家数も 2020 年以降 7 割近く減少する。秋川牧園は会社として、農地を減らさない、農家を減らさない取り組みをしているが、もともとは飼料用米への取り組みが始まりである。

農地集積では採算に合わない農地が残される。1～2 ha 規模の家族農業を残してほしい。新規就農にはコンバイン、トラクター、農舎などで 1.5 千万～2 千万円が必要となるので支援が必要である。危機を乗り越えるためには、多収品種、多収技術の確立が重要である。



[illegible]

秋川牧園 飼料米プロジェクト

# 成功のカギは圃場視察会

全生産者の圃場視察(年2回) 15年間継続

～圃場視察会について～  
 ・移動距離200km(6月～7月半まで)  
 ・栽培期間中2回の現地視察全て担当生産者から栽培管理状況の説明  
 ・至秋や中晩等の計測(土壌等)  
 ・肥料・農薬メーカーによる除草や病害虫の調査発表  
 ・圃場視察の先より現状の評価と今後の予測及び病害虫等の対処方法の説明をいただく  
 ・栽培技術や情報共有化、競争意識の芽生え→他人に見せるといふ意識で気取った管理はできない

稲作や稲作を営むことにより  
 生き物や資源を皆で管理する

飼料米生産者調査報告書

生産者	品種	収量	品質	栽培管理	圃場視察	その他
1	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
2	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
3	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
4	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
5	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
6	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
7	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
8	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
9	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
10	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
11	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
12	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
13	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
14	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
15	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
16	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
17	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
18	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
19	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
20	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
21	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
22	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
23	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
24	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
25	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
26	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
27	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
28	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
29	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
30	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
31	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
32	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
33	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
34	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
35	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
36	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
37	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
38	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
39	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
40	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
41	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
42	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
43	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
44	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
45	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
46	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
47	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
48	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
49	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
50	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
51	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
52	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
53	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
54	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
55	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
56	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
57	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
58	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
59	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
60	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
61	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
62	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
63	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
64	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
65	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
66	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
67	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
68	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
69	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
70	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
71	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
72	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
73	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
74	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
75	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
76	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
77	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
78	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
79	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
80	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
81	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
82	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
83	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
84	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
85	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
86	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
87	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
88	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
89	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
90	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
91	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
92	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
93	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
94	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
95	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
96	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
97	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
98	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
99	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
100	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2

事前に情報収集し共有する

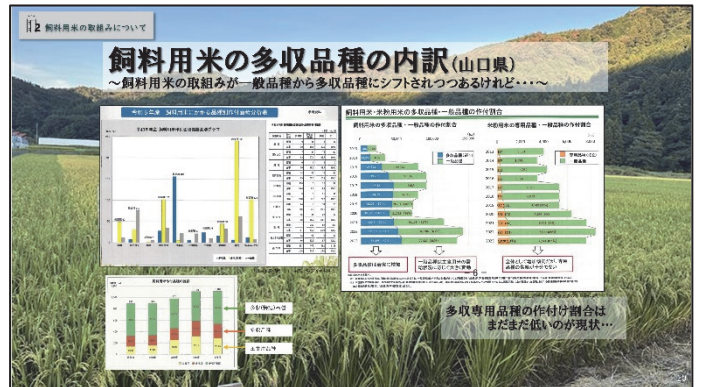
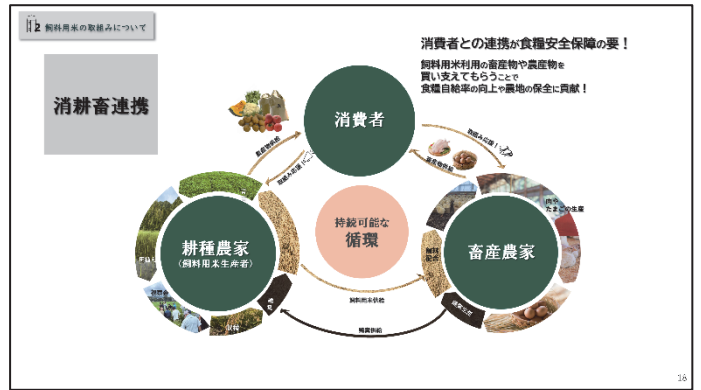
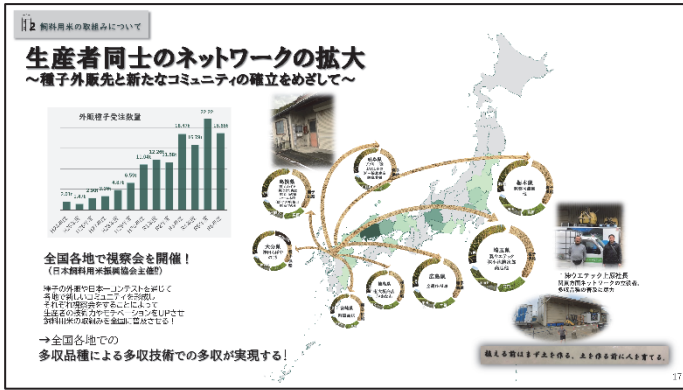
飼料米の取組みについて

視察会当日は  
計測した情報を  
野帳に記録し  
参考資料に

二多収技術レランド海地博覧会  
・オーストラリア・インドネシア

生産者	品種	収量	品質	栽培管理	圃場視察	その他
1	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
2	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
3	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
4	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
5	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
6	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
7	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
8	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
9	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
10	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
11	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
12	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
13	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
14	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
15	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
16	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
17	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
18	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
19	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
20	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
21	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
22	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
23	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
24	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
25	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
26	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
27	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
28	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
29	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
30	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
31	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
32	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
33	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
34	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
35	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
36	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
37	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
38	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
39	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
40	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
41	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
42	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
43	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
44	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
45	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
46	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
47	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
48	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
49	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
50	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
51	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
52	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
53	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
54	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
55	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
56	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
57	秋田県産 秋田県産	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
58	秋田県産					





4

13 飼料用米の取組みが  
もたらしたもの

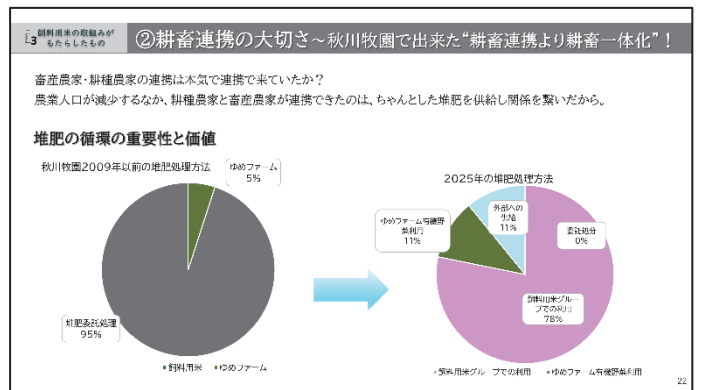
### ①10万ha(2024年産)の農地と それに携わる農業者を守ってきた飼料用米

飼料用米が守ってきた水田10万haは、(2022年14.2万ha、2025年4.93万ha)  
食糧自給率の向上よりも、**食糧自給力の維持**に貢献！

飼料自給率と食糧自給力

国内の農林水産業が持つ食料を生産する潜在的な能力  
国内の農地や労働力を最大限に活用した場合に  
日本人一人当たりがどれだけのカロリーを摂取できるかを計算したもの

食の多様化により、輸入が増加しコメの消費量が低下した  
このことにより米の消費が落ち、耕作放棄地や農業者離れが加速し、  
現在の自給力の低下につながった  
これからはおいしいから米を食べようという 米中心の日本食を取り戻す！  
美味しいがゆえに輸出もできる!!



4

13 飼料用米の取組みが  
もたらしたもの

### ②耕畜連携の大切さ～秋川牧園の子会社ゆめファームとの連携

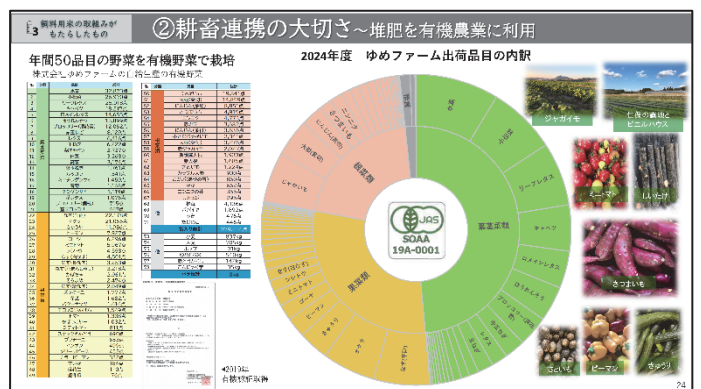
ゆめファーム岡場分布図

株式会社ゆめファーム

秋川牧園でサービスの展開を目的とした子会社として、経営の向上と地域の活性化を図る。秋川牧園の生産者と連携し、地域の活性化を図る。秋川牧園の生産者と連携し、地域の活性化を図る。

～ゆめファームの事業内容～

- ・地域産品(化学合成農薬や化学肥料を使わない)の生産
- ・秋川牧園の生産者と連携し、地域の活性化を図る
- ・秋川牧園の生産者と連携し、地域の活性化を図る





### ② 耕畜連携の大切さ～ゆめファーム果たす役割(社内・社外)

**ゆめファームの地域における役割**

- ・中山間での人手不足の解消、耕作放棄地の有効利用
- ・中山間で期待される農業法人に成長
- ・株式会社による中山間農業への参入、有機農業に好都合な中山間農地

**ゆめファームの果たす役割(社内と社外)**

(社内)～農地の有効利用 地肥の循環処理  
堆肥金を利用した良質な飼料用米の生産  
牧場～ゆめファーム連携  
ゆめファーム用配合から自ら完成品にまで飼料用米や有機農業関連の設備へ貢献。  
農インフラエンジニアが第一消費作業の応援、場合によっては夜間配布(冬季)

(社外)～農地の維持管理に協力する 意向(作業者(農地整備))  
水田の維持管理  
高齢者の見守り  
中山間農地での存在意義の充実

### ③ 消費者を味方にして、耕畜連携+消費者=消費畜連携

～実需者の理解を得て味方に～

耕畜連携に加わるべき消費者の存在 → 消費畜連携より消費畜一体化(同じ消費者として)  
全ての取組みは消費者のために…食糧自給力向上のための生産力確保

→ 農業者を増やし農地の荒廃から守る！

ゆめファームの中山間有機農業と水稲の多収品種と多収技術によるお米の生産は食糧安全保障において重要な役割を果たす！

### ④ 良質な地域循環とは…

産業廃棄物とは言わせない(あくまでも農家にとって有益な堆肥である)

**畜産農家は耕種農家の立場での堆肥作りを！**

畜産廃棄物が肥料に変わるという循環という感覚だけでなく、飼料用米生産者のため良質な堆肥を作るという事を入れるべき！

**結果を信頼に！**

耕種農家も実需者である畜産農家の良質な堆肥を利用することを条件に！

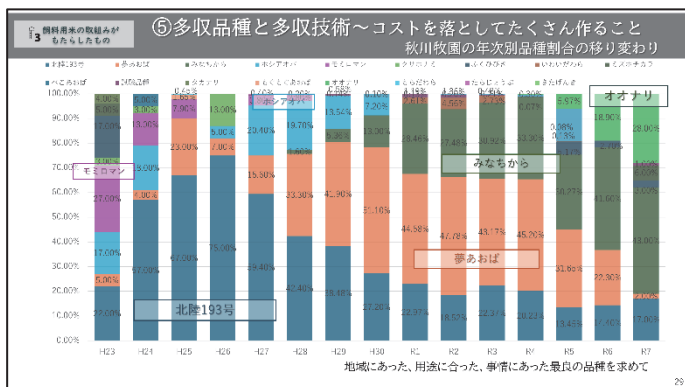
耕種農家に専用堆肥舎の設置を支援(国県行政のすべきこと)

### ⑤ 多収品種と多収技術

**オオナリと北陸193号(現在の最多収品種)**

誰が作っても1000kg超えのお米

豊収量を獲得するお米 茎の頭丈が課題



### ⑤ 多収品種と多収技術～コストを落としてたくさん作ること

飼料用米専用品種のメリット・デメリット

品種	メリット	デメリット	改善点や気づき
セミロマン	・多収 ・収容性に強い	・一歩多収に弱い ・不熟米が多い(穂の処理に難)	・収容をよめるために、不熟米の改善を
北陸193号	・多収 (秋川グループでは収容性多収 1000kg/ha以上)	・穂が太く、穂の処理に難 ・ここ数年はもち米にかかっている ・つやが良く、全粒の収穫(粒数が多い) ・茎が太く、刈り取り、コンバインへの負担大!	・ワンランク上穂長の粒、合わせを ・粒数の改善 ・もち米の改善 ・一歩多収の改善
みなちから	・収容性 ・刈り取り時に茎が太く、穂の処理に難 ・不熟米が多い(穂の処理に難) ・不熟米が多い(穂の処理に難)	・一歩多収に弱い ・不熟米が多い(穂の処理に難) ・不熟米が多い(穂の処理に難)	・収容性をよめるために、不熟米の改善を ・一歩多収の改善 ・一歩多収の改善
夢あおば	・多収 ・収容性に強い ・不熟米が多い(穂の処理に難) ・不熟米が多い(穂の処理に難)	・一歩多収に弱い ・不熟米が多い(穂の処理に難) ・不熟米が多い(穂の処理に難)	・収容性をよめるために、不熟米の改善を ・一歩多収の改善 ・一歩多収の改善
オオナリ	・多収 ・収容性に強い ・不熟米が多い(穂の処理に難) ・不熟米が多い(穂の処理に難)	・一歩多収に弱い ・不熟米が多い(穂の処理に難) ・不熟米が多い(穂の処理に難)	・収容性をよめるために、不熟米の改善を ・一歩多収の改善 ・一歩多収の改善

多収品種の改良を前進させる  
・早生で多収品種、ワンランク上穂長の品種  
・イモチに強い品種、一歩多収、しかも茎がみなちからみたいに柔らかいなど

### ⑤ 多収品種と多収技術～コストを落としてたくさん作り反収1000kg取りをめざすこと

～多収にこだわり続けた16年…秋川牧園の品種改良の取組み

**飼料用米専用品種について**

まずは絶対多収であること。  
多収でなければ意味がない→反収1000kg以上  
さらに早生・晩成の2系統 加えて耐虫性・耐病性(ワンカ・イモ病)

地域別適合品種の選定  
飼料用米で増ったノウハウをいずれば食用にも生かす！

**農研機構との15年を超える連携(これからの米作りのために)**

ずっと目指してきた多収品種・多収技術が  
令和の米不足・食料安全保障の議論の中で生かされることに…！  
目指してきた、未来が見えてきた！！

### ⑥ 飼料用米生産者グループの現状とこれから

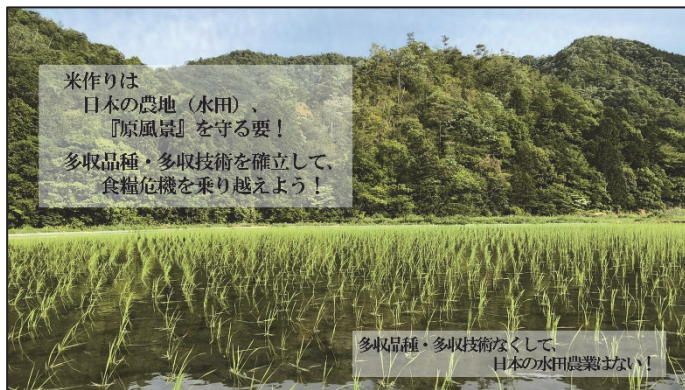
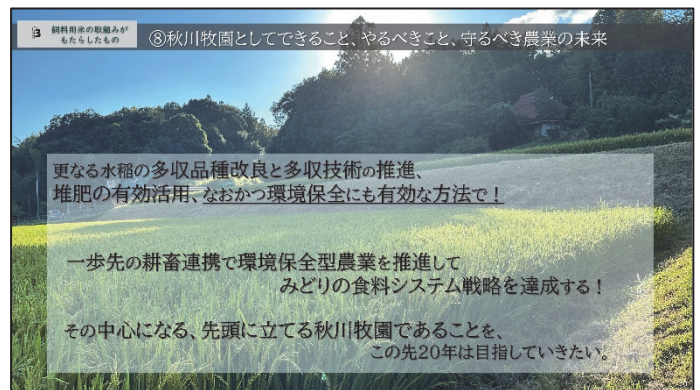
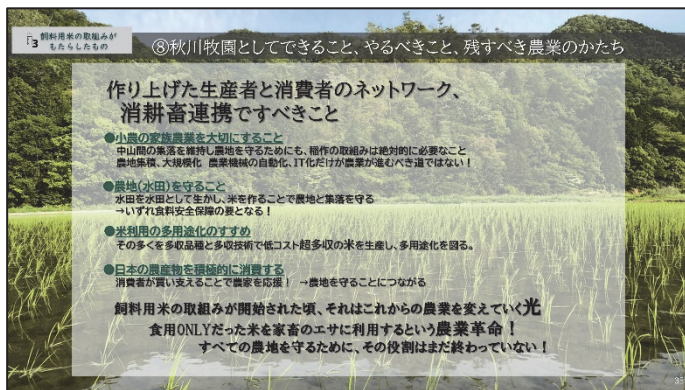
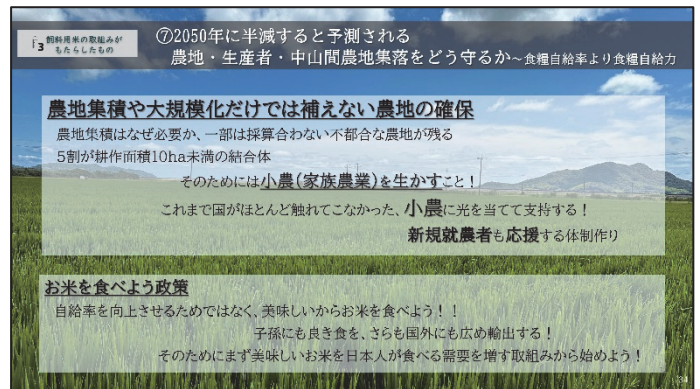
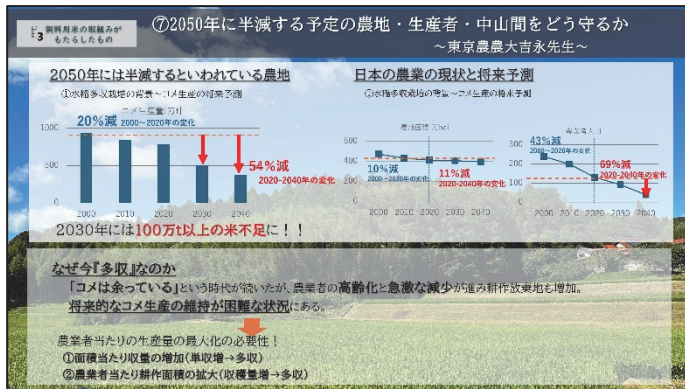
～飼料用米生産者が訴えたかった事 秋川牧園と農業者とのきずな

水田は水田。畑地にするには無理がある。  
水田に最も適した米を作らせてほしい！  
飼料用米づくりに米作り、日本の農地を守り原風景である田舎を守る！

このことをずっと訴えてきた  
令和の米不足を経て、やっと国は米の増産に舵を切ると決めた  
これから先の重要なこと  
年々低下する自給力  
農地の確保と生産者の確保には限界がある。

それを備うのが、米の多収品種と多収技術！  
→ これまで飼料用米多収日本一コンテスト表彰受賞の美濃がモデルとなる





### 第三部 意見交換 「会場の皆さんとの意見交換」

**司会 引地和明氏（全日本配合飼料価格畜産安定基金 常務理事）**

第三部の意見交換を始めます。事例発表に対して何か質問、ご自身の経験からご意見等をいただければと思います。

**藤井照雄氏（山口県 （有）萩見蘭牧場 取締役）**

高崎さんは堆肥の一部を輸出しておられるが、①あえて輸出するのはなぜか、②輸出品という商品にする場合の国・行政の対応はいかがか、③畜産 DX による肥育成績の向上に向けどのように取り組み、どのような成果があったのか、伺いたい。



**高崎淳史氏（鹿児島県 （株）高崎畜産）**

堆肥の取り扱いに困っていたところ、飼料会社から輸出してはどうかと提案された。このため価格はゼロ円にして、フレコンで 100 トンを輸出した。ゼロ円としても、人件費、フレコンバッグ代、輸送費などがかかるので持ち出しである。輸出の話があった時、社内で検討し、輸出で堆肥をはけるならやってみようとなった。現在、今年の 6 月から毎月 100 トン、ラオス、カンボジアなどに輸出している。U-motion の導入による肥育成績としては、病気、横臥の早期発見による効果がある。夜間の監視人をつけており、横臥などの異常を確認している。スマホの情報は誰が見ても分かるので、対応しやすい。現在、脂肪腫が懸念されており、病気の早期発見は重要である。U-motion のセンサーで餌の摂取量が落ちたところで出荷できることも有利である。首掛け式のセンサーだったが、今年から耳標式センサーを入れる予定である。

**瀬ノ口武氏（鹿児島県 （株）ジャパンファーム）**

江夏商事の原園さんへの質問で、補鳥コンテナの導入によって作業している人の負担はどの程度軽減したのか。



**原園和洋氏（宮崎県 江夏商事(株)）**

カゴは小さな中に入れていけないといけないということと、そのカゴを移動させないといけないということが捕鳥の方には負担になっていたのですが、コンテナに移行したことで補鳥に関しては変わってないが、その代わりその後の移動とか積み下ろしが不要になって負担が減ったと思います。



## **花田 広氏（宮崎県 配合飼料価格安定基金協会 理事長）**

高崎畜産さんへの質問で、宮崎県は 400 万トンぐらい家畜排泄物が出ます、これをどう処理していくかが課題です。農地は 6 万ヘクタールということで非常に狭いものですから、いろいろと検討してきましたが、現在は堆肥を 5,000 トン程度県外に出している状況ですが、なかなか海外まで輸出しようということになっておりませんでした。詳しい話をお聞きしたいと考えております。



秋川牧園の村田さんの講演で、非常に今日私が勉強になったのは、我々は減反政策とあわせて、WCS で 7,000 ヘクタールまでできましたが、飼料用米は今減ってきて数百 ha になっているような状況です。本日、先生がおっしゃったように、WCS、飼料用米を作る政策によって農地が守られてきた。だから、今、米作を増産体制に移れと言われても、すぐに対応できるということが無駄じゃなかった。非常に大きな成果だということをいろいろな場面でこういう言い方をすればいいんだなということで非常に勉強になりました。

江夏商事の原園さんへの質問で、宮崎県は鹿児島に次ぐプロイラー県でございます。7～8 年前になるのですが、捕鳥班が夜中、移動中に事故にあいまして慌てたことがございまして、それ以降、捕鳥機をなんとかしなければということで要望等をやってきました。

独自に入れればいいのしょうけれども、国の補助なりがないと、これはなかなか進まないというようなことで、国の方へも働きかけをしたのですけれども、なかなか実現しませんでした。今回、国の方の感触というのがどんなものか、教えていただければと思います。よろしくお願いします。

## **原園和洋氏（宮崎県 江夏商事(株)）**

捕鳥機を入れるための補助金がないか検討した。県へ対象補助金を確認したが、実績がないと無理とのことであった。直接の補助金はなかったが別の補助事業があったので、申請している。導入実績ができれば、業界の皆さんも補助を得て導入しやすくなると期待している。

## **村田 洋氏（山口県 (株)秋川牧園）**

飼料用米が来年どうなるか分からないが、コメが作られるのであればよい。16 年前、コメは神聖であり、家畜の餌にすることに抵抗があった。しかし飼料用米によって水田を守ったのは事実である。需要動向によって生産は変わるが、今は食用米生産の機運が高まっている。

## **高崎淳史氏（鹿児島県 (株)高崎畜産）**

日産 10 トンの堆肥処理が可能な機械があり、これを入れれば堆肥を撒く農地を減らせる。10 台入れれば一日 100 トン処理できると社内では言っている。堆肥の処理に困れば輸出する方法がある。堆肥処理機を入れる補助事業があればありがたい。

### 松原英治（全日畜専門員）

家畜飼養戸数の減少が止まらず、高齢化が進んでいるが、日本の畜産を担う大畜産県の鹿児島県として、5年後、10年後の県の畜産のビジョンをどのように想定されておられるのか。村田さんのおっしゃる消耕畜連携の確立は究極の地域資源管理と思う。秋川牧園さんの取り組みを広げるには、取引先の拡大や研修会などが必要と思う。多収量品種の種子や堆肥の販売で、関東にまで取引先が広がっているが、今回の資料をもとに、村田さんだけではなく、若い社員にも研修会や講演会などで、積極的に秋川牧園の取り組みを伝えていただきたい。秋川牧園イズムといった形で、消耕畜連携が広がれば、行政も取り上げ、取り組みがより一層広がると思う。原園さんの捕鳥機について、捕鳥コンテナを含め外国の機械だが、需要に比して開発費が大きいので販売価格は高額となり、スペアパーツの確保、運営なども高額になると思う。このことにどう対応されているのか。また、このような高額な機材であれば、費用対効果は低いと思うが、それでも捕鳥コンテナ、フォークリフトの改良、捕鳥機の導入など高額投資を決断されたのは、どのような事情があったのか。江夏商事さんの100年企業としてのノウハウがあるのか。



### 村田 洋氏（山口県（株）秋川牧園）

現会長からは、いくら内容が良くても熱意がないと伝わらないと言われてきた。鶏糞堆肥の利用方法として、飼料用米に熱中させてくれた会長がすばらしかった。1972年から有機農業に取り組み、野菜をつくってきた。農業の現場では、土日もなく、炎天下で水やりしたり、苦労して育てても、価格に反映しない。これでいいのかと思ってきた。飼料用米を進めながら、農業の未来にきっかけが見つかり、関係者から共感され、続けることができている。

### 原園和洋氏（宮崎県 江夏商事(株)）

捕鳥用の機械はイタリア製で、コンテナ捕鳥のフォークリフトは専用のフォークリフトである。パーツもイタリアから取り寄せる。伊藤忠マシテクノスがCMC社の日本の総代理店となった。機械のメンテもメーカーにやってもらう。機械の導入時、技術者をイタリアに派遣して、技術を習得させる予定である。コンテナ捕鳥の導入に当たり、社長の岩崎が必要かどうか判断した。捕鳥作業を行う人がいないので経営が立ち止まっているなら、やるしかないという判断だった。自分たちが必要と判断すれば他社動向に関係なく取り組む姿勢で経営している。

### 岩田英稔氏（鹿児島県北薩地域振興局）

5年後、10年後のビジョンについて、国の酪農・肉用牛生産近代化計画、家畜改良増殖目標などに従って県の計画が立てられ、ビジョンが出来上がっていく。個人的な意見として、畜産は県としてもなくてはならない産業であり、



大規模化、新規就農の支援、海外を含めた需要の拡大を進め、やめていく農家と歩調が合わないかもしれないが、可能な限り維持していくことに努めると思う。

**司会 引地和明氏（全日本配合飼料価格畜産安定基金）**

このシンポジウムの事業を推進する上で3名の推進委員に出席いただいておりますので、今日のシンポジウムについての感想など、お話をいただければと思います。まず、千葉県で実際に養豚経営をされております清和畜産の早川さんからお願いいたします。

**早川結子氏（推進委員 畜産経営者）**

今日は発表者の皆様方、大変貴重なお話をありがとうございました。

実家は畜産とは関係ないが、動物が好きで獣医を目指し、千葉県で養豚経営を行っている。飼料を輸入に頼り、規模拡大、スマート化を進めてきた。鹿児島県は畜産ビジネスのスケールが大きいので驚いた。経営が6次産業化されている。DX、AWを目的とすると、費用割れを起こすが、自身の経営のためという目的であれば意義がある。3名の発表者の畜産生産と3次産業化、村田さんの飼料用米の重要性といったお話から、畜産を総合産業として位置付けられることが分かった。捕鳥機についても、日本でも製作できるのではないかと。畜産に光が見えたことがありがたい。



**三宅俊三氏（推進委員 山口県配合飼料価格安定基金協会 常務理事）**

高崎畜産さんの7千頭でのU-motionの使用について、これだけの規模でDX技術を導入すればどれだけ効率化が進み、効果的か驚かされた。大規模畜産が大規模な耕種農業を行うという今までにない畜産の方向性が示された。江夏商事さんの捕鳥機の取り組みだが、私も捕鳥をやったことがあり、大変な作業である。しかも労働力がなくなり、食鳥経営のボトルネックとなる現状で、全国の食鳥経営においても大きな取り組みといえる。秋川牧園さんは、資源循環というキーワードで消耕畜連携に取り組まれているが、まさに循環の根幹に当たる。ぜひこの取り組みを全国に広めていただきたい。



**川村治朗氏（推進委員 千葉県配合飼料価格安定基金協会 常務理事）**

高崎畜産さんのU-motionによる牛群管理は、牛にも優しいDXで、データが見える化しており、素晴らしい取り組みである。江夏商事さんの捕鳥機の導入につき、その投資判断の行動力に感心した。秋川牧園さんは、千葉県の講演会に来ていただき、講演していただいた。資源の地域循環において、畜産農家、耕種農家の活動に、消費者を巻き込むことの重要性を改めて知らされた。



## ◎モデレーターから

### 司会 引地和明氏（全日本配合飼料価格畜産安定基金）

SDGs だとか、DX だとか、新しい言葉がいっぱい、世の中にキーワードが出てくるわけです。

畜産におけるという冠がついて、そしてどうするこうするという事で、まさに今日お三方、県庁の方も含めて、それを現場で実践されておるわけです。私もこの世界に長いんですけども、こういうものを外から、消費者の方から見ると、畜産というのは、堆肥の問題も含めて加害者みたいな見方をどうしてもされがちだし、アニマルウェルフェアにしても、まさにそういうことだと思います。決してそういう思いはないのですが、それを解決しようと皆さん頑張っているということで、今日のお話を聞いて、具体的にその解決の糸口を見いだそうということで、それぞれの地域で頑張っているということは、関係者みんなで共有すべきであるし、私たち、こうした団体もそれを強く発信していくお手伝いをしていくことが重要だと改めて感じました。

## ◎閉会挨拶

### 隅 明憲（全日畜理事（有）鹿野ファーム代表取締役）

本日のワークショップでは長時間にわたりお付き合いいただきまして、誠にありがとうございました。また、事例発表で御登壇いただいた皆様には、本当に参考になるすばらしいお話を聞かせていただきまして、誠にありがとうございました。DX やアニマルウェルフェアという切り口からのお話ではありましたが、経営理念の根幹に関わるようなお話を伺えたなという気がいたしました。



畜産に携わる者は様々な課題や問題を抱えておりますけれども、その問題について、たじろいで歩みを止めてしまう者と、そこに立ち向かって新しいチャレンジをされている方々の差というのも強く感じました。大変刺激を受けることができました。今日は本当にありがとうございました。

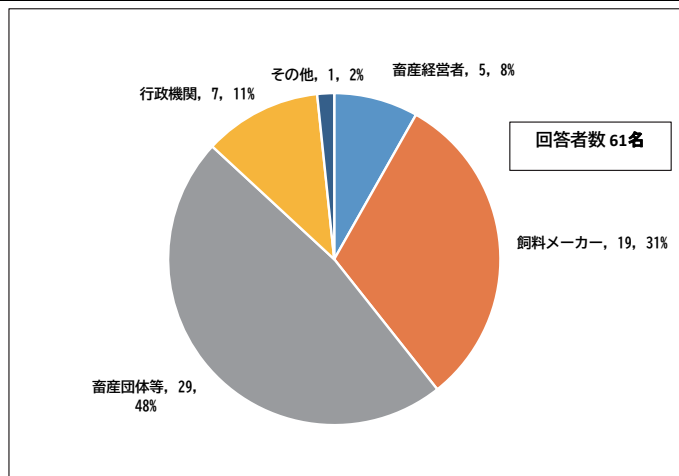
以上





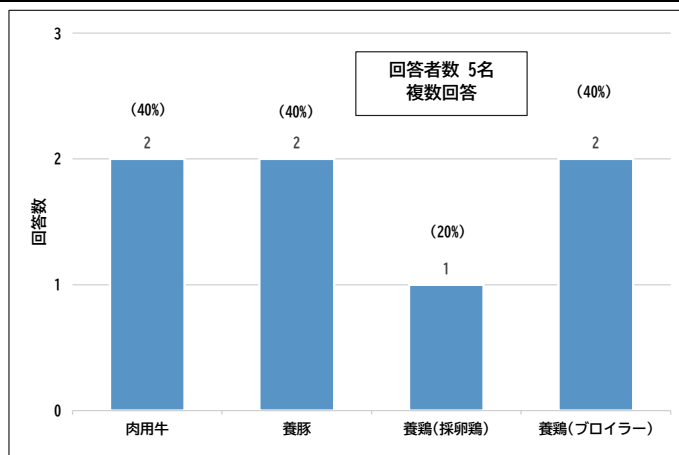


## 問1 回答者の属性



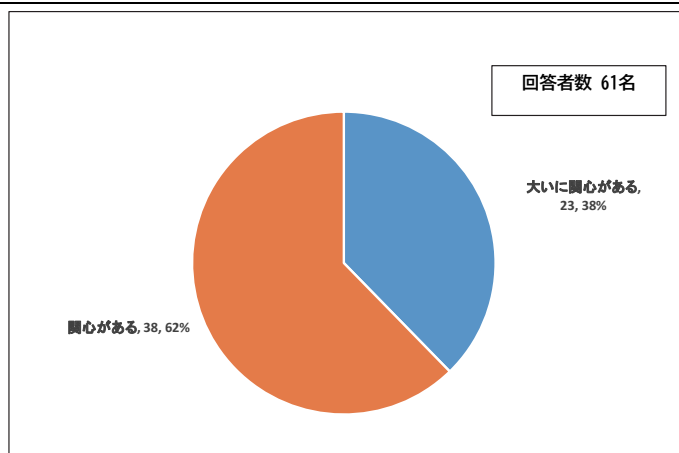
回答者の属性は、「畜産団体等」が 48%、「飼料メーカー」が 31%、「行政機関」が 11%、「畜産経営者」が 8%であった。また、「その他」の回答が 1 名、2%あり、具体的には「民間会社」であった。

## 問2 畜産経営の「畜種」



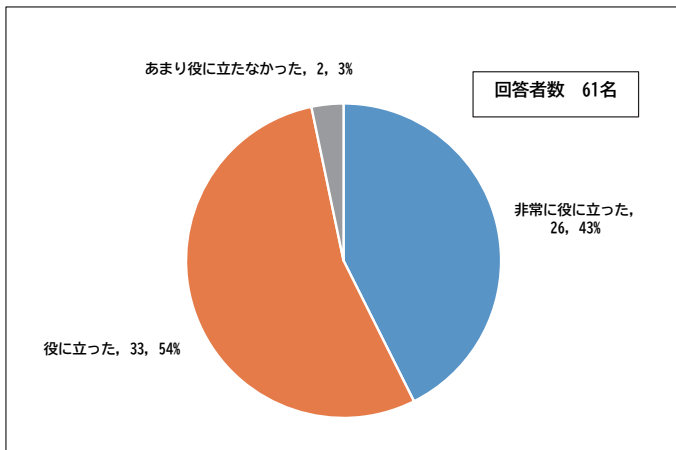
前問で、「畜産経営者」と回答した者 5 名の「畜種」については、「肉用牛」、「養豚」及び「養鶏(ブロイラー)」が 40%、「養鶏(採卵鶏)」が 20%であった。この内、「肉用牛・養豚」、「養鶏(採卵鶏)・養鶏(ブロイラー)」の畜種複合経営が 1 名ずつあった。

## 問3 「畜産 DX とアニマルウェルフェアで開く経営の未来」の関心度合い



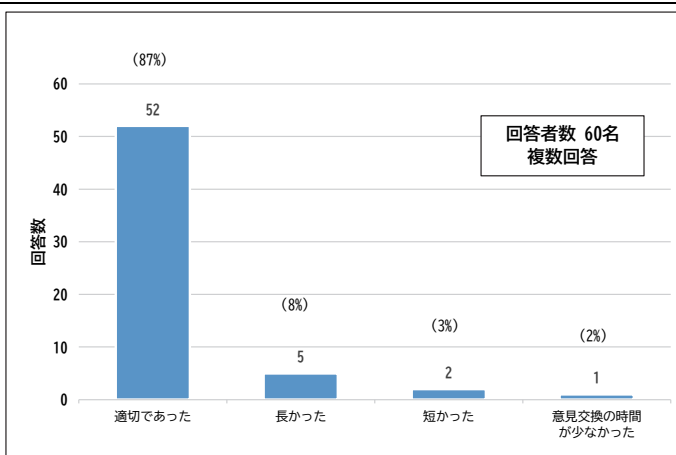
ワークショップのテーマである「畜産 DX とアニマルウェルフェアで開く経営の未来」への関心度合いは、「大いに興味がある」が 38%、「興味がある」が 62%と、回答者全員の関心が高かった。

#### 問4 本日のワークショップは役に立ったか



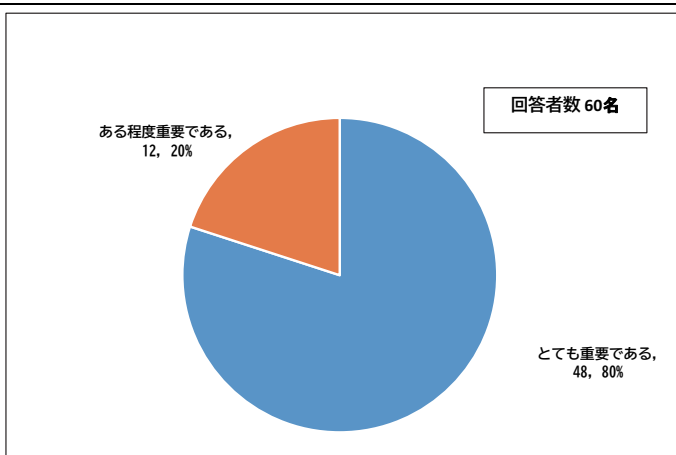
ワークショップが役に立ったかについては、「非常に役に立った」が 43%、「役に立った」が 54%と大多数の回答者が肯定的な回答をしている。他方、「あまり役に立たなかった」とする回答が 3%あった。

#### 問5 時間配分について



時間配分については、「適切であった」が 87%であった。そのほか、「長かった」が 8%、逆に、「短かった」が 3%、「意見交換の時間が少なかった」が 2%あった。

#### 問6 「畜産経営の持続可能な開発目標対応調査事業」は重要と考えるか



「畜産経営の持続可能な開発目標対応調査事業」は重要と考えるかという問に対しては、「とても重要である」が 80%、「ある程度重要である」が 20%と、回答者全員が肯定的な回答をしている。

## 問7（自由意見）

✓捕鳥作業の自動化とアニマルウェルフェアでビデオ映像があったが、その映像を閲覧できるとありがたい。コンテナの導入に至って工場の製造ラインの変更はどんなことがあったのか？ どの位の期間あったのか？ どの位の金額がかかったのか？ が気になった。労働人口の減少や後継者の減少の話が出るので若手の社員へも聞いてほしい内容だった。

✓捕鳥機の導入について、先駆者として勇氣ある取り組みに感動した。先端を進む人の話は大変勉強となる。

✓江夏商事のコンテナ捕鳥を詳しく聞きたかった。カゴ→コンテナへの移行で農場で何をしたかなど。

✓演題テーマも大きな事業であり、刺激を受けるものであった。一方で、装置産業でもあり、今後の補助事業についても詳しく調べたい。

✓アニマルウェルフェアの風景(7P のコンテナ)の現場見学が可能か？これからの時代は、必ず必要になるシステムと思う。

✓飼料米が水田を守ってきたという視点に気づかされた。

✓畜産業における人手不足問題解決と労働環境改善において、畜産 DX 技術の導入はとても意義のあることだと思った。そして、さらにアニマルウェルフェアにも配慮した生産システムの構築にもつながるのではないかと思った。秋川牧園の発表の中にあった「食糧自給率より食糧自給力」、「消耕畜連携」というフレーズがとても印象に残った。

✓テーマと直接関係はないが、現場では人材・人員不足は今後ますます大きな問題になると思う。国内での人員確保への対策も重要だが、海外からの人員確保も継続されるため、この関係の問題点等の話題も取り上げてみてはどうかと思う。

✓畜産 DX、アニマルウェルフェアに取り組むにあたり、初期投資が必要になることが多いが、その点については行政の補助なども必要であると感じた。

✓DX の普及を図るためには、販売する者が生産者に寄り添うことが大事。売るだけでなく、使えるようになるまで、見捨てないことも大切と思う。

✓配合飼料価格安定基金制度の制度設計の見直し。マルキン制度の和牛や交雑のコスト計算の見直し。

✓非常に勉強になった。

✓早く退職して、米作りを始めよう!!

✓食糧安全保障は国の根幹。そこを支えている生産者に手厚い支援をして欲しいと考える。次回は、農水省、財務省、経産省の人を招いて、食糧安全保障について議論してほしい。

✓ありがとうございました。このセミナーの話を色々な客に話をしてヒントを与えればと思う。

✓空調が効きすぎて寒かった。

✓意見交換会が間延びして良くなかった。感想の言い合いでしかなかった。



2025(令和7)年

9月5日  
金曜日

旧暦7月14日  
友引

日	月	火	水	木	金	土
31	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	1	2	3	4

# 南日本新聞

きょうの歴史  
1991年

## 先住民条約発効

先住民の独自の文化、伝統、経済を維持することを尊重する「先住民および種族民に関する条約」が発効した。89年の国際労働機関総会で採択。先住民の人権や基本的自由の侵害を禁止し、開発に際しての雇用や職業訓練などを規定している。

南日本新聞社 発行所：〒890-8603 鹿児島市与次郎1-9-33  
☎099(813)  
紙面の問い合わせは ひろは室5110(平日9時半～17時半)  
報道5124 総合受付5001 販売5040 広告5063 事業5052

## DXや動物福祉学ぶ 全日畜がワークショップ

鹿児島市

全日本畜産経営者協会  
(全日畜 東京) は4日、



畜産のデジタルトランスフォーメーション(DX)やアニマルウェルフェア(動物福祉)に関するワークショップを鹿児島市で開いた。県内外の畜産関係者ら約80人が参加。先進事例を学び、畜産経営の安定や発展に生かす方策を探った。

事例紹介では、薩摩川内市で肉用牛を生産する高崎畜産の高崎淳史専務が登壇。牛の行動管理システムを導入した結果、繁殖牛は授精のタイミングが「見える化」され、分娩間隔短縮や繁殖成績向上につながったと説明し、「肥育牛の事故防止や従業員の仕事軽減にもつながっている」と述べた。

畜産のデジタルトランスフォーメーション(DX)やアニマルウェルフェアを考えたワークショップ4日、鹿児島市の鹿児島サンロイヤルホテル

鹿児島市や宮崎で肉用鶏の生産販売をする江夏商事(宮崎)は、家畜をストレスの少ない快適な環境で飼育するアニマルウェルフェアについて報告。出荷前の捕鳥作業の労力を減らす専用コンテナや運搬車の導入メリットを紹介した。

意見交換会もあり、参加者からは「DXが肥育成績の向上にどの程度つながるか」「海外製の捕鳥機導入に対する故障やメンテナンス面の不安はないのか」など、積極的な質問が飛び交った。(池端絃一郎)



**「全日畜」は畜種横断の畜産経営者の団体です**

